

ドイツにおける地誌学の研究動向

森 川 洋*

Recent Progress in German Regional Geography

Hiroshi MORIKAWA*

目 次

- | | |
|--------------|-----------------------|
| I. はしがき | IV. 地誌研究所の創設とその役割 |
| II. 地誌学の研究動向 | V. その他の地誌研究機関とエリアスタディ |
| III. 地域概念の展開 | VI. むすび |

I. はしがき

地理学は地誌学と一般地理学(系統地理学)によって構成されるが、個性追求的アプローチ(idiographischer Ansatz)を主とする地誌学は¹⁾、一般地理学の隆盛の陰に隠れた存在となっている。しかしそれは、地誌学が全く不用なものと考えられているからではない。わが国でも、地理学を専門とする多くの大学教師が地誌学の講義を担当しており、地誌学に対する関心はかなり高いことが知られる²⁾。

ところで、最近のヨーロッパでは地誌学の研究に対する新しい動きがみられ、その動向には注目すべきものがある。筆者はその一部についてすでに紹介したが(森川, 1992)、その後明らかになったこともあるし、地誌研究自体の進展もみられたので、より詳しく紹介したい。本稿ではドイツ語圏の動向について紹介し、アングロサクソン圏の動向については次号で報告することにする。

1994年に出版された『地誌学の方法論的課題—フランスを例として—』は、ユトレヒト大学とアムステルダム自由大学が協力して行った地域研究プログラム(REGIONAL Studies Program, REGIS)の研究成果を収録したものであるが、それによると、ドイツ語圏における地誌研究の動向については、次のように評価されている(Hoekveld, *et al.*, 1994)。

ドイツの地誌研究にはイギリスやフランスとの類似点もあるが、基本的には相違したも

* 広島大学総合地誌研究資料センター長 ; Director, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University

のといえる。フランス地理学者とともにドイツ地理学者は自然人間関係、景観発生、記述方法に関心をもつが、ドイツ地理学の特殊性はヘットナー(Hettner, A.)によるコロロギー(Chorologie)の伝統と景観地理学との統合にあった。しかし、この統合は1970年代には否定され、以前よりも複数路線による研究(pluralism)が地理学各分野を支配するようになった。

ポーベク(Bobek, H.)やハルトケ(Hartke, W.)によるシュリューター(Schlüter, O.)の景観地理学に対する機能主義的展開やその後の空間分析は、伝統的なドイツ地誌学におけるコロロギッシュな枠組の打破に大きな影響を与えたといえる。しかし、その後導入された「空間的アプローチはドイツ地理学者の心の深奥には到達せず、本来の地理学的アプローチの沈殿物を払拭することはできなかった。もちろん、地誌研究も近代化され、記述的なものから問題指向的な地誌へと移行した。しかし地理学の指針となる理論をもたないので、地誌学はむしろ折衷主義的な性格をもっている」(Bahrenberg, 1988)。

ドイツ地理学者はまたフランス人と同様に、地域研究を好み、とくに外国に興味をもっている³⁾。海外研究には長期にわたって優れた伝統があり、それは戦後においてより強く成長した。また、戦後で膨大な量の出版物の多くは、地域計画に利用されてきた。計画に精を出す地誌研究者は地域政策による地域発展を強調する。しかし、一般社会理論における場所(place)や空間(space)の概念を統合しようとする試みはなく、地誌学再生に関する理論的な論議に多くのエネルギーを注いできたイギリスとは著しい差異がある⁴⁾。

以上のように、ドイツ地誌学は「理論と実践における複数路線」に特徴があるとされているが、最近の変化には著しいものがある。1992年には、第IV章で詳しく述べるように、ライプチヒに地誌研究所が創設されたし、1994年11月7～8日には同地誌研究所で「地域地理学の理論」に関するゼミナールが開催された⁵⁾。さらに、来年度には同地誌研究所でイギリスのスリフト(Thrift, N.), マッシー(Massey, D.), オールズ(Olds, K.)らを招いて地誌研究に関する意見交換を行い、その後も継続して実施することが予定されている⁶⁾。また最近では、ヴェアレン(Werlen, 1993a), プロートフォーゲル(Blotevogel, 1996a, b), ウッド(Wood, 1996)など外国の—とくに英語圏の—研究動向にも注目した地理学・地誌学に関する研究論文が相次いで発表されている。したがって、今日すでに新しい地誌学について大きな成果をえたとはいえないにしても、変革期を迎えつつあることは間違いないようにみえる。

本稿の目的はドイツの地誌研究の動向について考察することであるが、周知のように、地誌学は地理学の重要部分を占めていて両者を厳密には区別できないので、地理学の問題にも触れることになる。第II章ではドイツの地誌研究の動向をパラダイムの変化に従って3期に分けて述べた後、第III章では地誌研究にとって鍵概念である地域概念の変化・発展

について展望し、第IV章では地誌研究所の創設とその活動、第V章ではその他の大学における地誌研究やエアスタディについて報告する。

II. 地誌学の研究動向

1. キール大会以前

19世紀末におけるドイツ地理学は自然科学的指向が強く、自然地理学を中心とする一般地理学は地域研究よりも上位のものと考えられ、少なくともベルリンにおいては第1次大戦まで地誌学の発展チャンスは閉ざされていた (Wirth, 1987)。それに対して、ハイデルベルク大学のヘットナーは一般地理学と同格の地理学分野として地誌学を位置づけることに努力してきた。彼が科学理論的基礎として用いた地誌図式 (länderkundliches Schema)⁷⁾ は、自然地理学とのアナログにおいて、地誌学を因果的に考察すべきであるとしたもので、地形や気候から集落・経済に至るまでの地誌記述の順序は因果的連鎖によって結合されると考えた。彼は「異なった地表的位置の間においてなんら因果的關係がなく、同一地点上にある種々の現象が互いに無関係に存在するとしたら、そのときには地理学を必要としないだろう」と述べている (Hettner, 1927, S.117)。

これに対してシュペートマン (Spethmann, 1927; 1928) は、地誌図式は決して一方方向にだけ進む因果的連鎖によって成り立つとはいえないとしてすぐさま反論したが、彼の声は学界にあまりとどくことなく、ヘットナーの主張がドイツ地理学界をリードすることとなった。第1次大戦後10年間には、ヘットナーの地誌図式は当時の学界をリードしていたグラートマン (Gradmann, R.)、クレープス (Krebs, N.)、シュレツパー (Schrepfer, H.)、ラウテンザッハ (Lautensach, H.)、クラウス (Kraus, Th.) らに受け入れられた。彼らにとっては、地誌学はまさに地理学の玉座におかれた。ラウテンザッハ (Lautensach, 1952) はまた、空間的な形態変化論 (Formenwandellehre) を唱えて新たな方法論を導入することに努力した。

しかし、労働分業や交通通信技術が発達し、経済のグローバル化に伴って地域間の水平的ないし垂直的結合関係が増大してくると、地理的現象はもはや局地的な(自然的な)所与の条件にのみ根ざすものではないことが次第に決定的なものとなってきた。そうしたなかで、ボーベクとシュツミットヒューゼン (Bobek u. Schmithüsen, 1949) は地理学の科学理論的な正当化に努力した。地表面はそれぞれが独自の秩序原理をもった無生物界、生物界、精神界からなるので、これら3者はそれぞれの法則を求めなければならない。そして、これら3つの現象が相互作用によって統合されたのがラントシャフト (Landschaft) であ

るとする。すなわち、ラントシャフトとは統一的な全体的特性 (Totalcharakter) をもった具体的な空間単位である (Bobek, 1957)。

彼らによれば、地理学は「地理的要因の段階的統一」をもって研究すべきである。要素と要素の複合体を理解するのが一般地理学であるのに対して、高度な複合体を地域類型的に理解するのがラントシャフト学 (Landschaftskunde) であり、最高度の複合体を理解するのが地誌学 (Länderkunde) であるとし、地誌学を最高の複合体として位置づけた。ここでは、一般地理学は多分に補助科学的性格をもち、地誌学がその努力の最終目標であるとみる。したがって地理学の体系では、局地的な地的要因の関連に関する考察から地理的要因それぞれの内部的空間構造を踏まえた総合的考察へと移行したといえる。

この見方によれば、地表上の地域は任意に区切られるので、地表面は多くの地理的個体 (geographisches Raumindividuum) からなるとしたリッター (Ritter, C.) の地域観を否定することになる (Bobek, 1957)。しかしポーベクは、「地誌は包括的であって、そのすべてを考慮しなければならない」、「地理学のなかでは地誌は最も古く、最も議論の余地のない分野であり、その目標は全地表ないしは特定部分を、その個々についてまた集団としてその全体的特質 (gesamtes Wesen) について把握し記述することにある」と述べている。それは無数にある地的要因 (Geofaktoren) の全体を考察の対象とすることを意味する。すなわち、地表の全現象を把握しようとする地誌への要求は、ユートピア的であるだけでなく地誌学の理論的根拠の説明という点でも全く不可能なものであった (Wirth, 1987)。このような考えは以前からずっと続いてきたわけではない。例えば、ヘットナー (Hettner, 1934) はこうした考えを否定している。

このようにして地誌学は、学問的優位と社会的有用性を求めて相争う大学における地理学のパラダイムの中心に位置づけられたようにみえた。しかし、地誌学中心のパラダイムは旧西ドイツでは1960年代には危機にさらされ、その年代の半ば頃には地誌学は否定されるようになった⁸⁾。旧西ドイツでは第37回ドイツ地理学会 (キール) 大会において地誌学批判が爆発したが、旧東ドイツでは旧ソ連地理学の強い影響のもとで早くも1950年代において、時代遅れのブルジョア科学であるとの非難が公式に行われていた (Blotevogel, 1996b)⁹⁾。

2. キール大会とそれに続く1980年代前半まで

大学紛争さなかに開催されたドイツ地理学会キール大会は、すでに指摘したように、地理学のパラダイムに大きな転換をもたらし、ドイツ地理学史上重要な意味をもった大会となった (森川, 1982; 1992)。

合衆国において従来の科学理論を鋭く追求し、科学哲学立脚して地理学の例外主義 (exceptionalism) を非難したシェーファー (Schaefer, 1953) の発想からすると、地誌学は記述的な応用的なもので、一般地理学の1分野とみられる。シェーファーの批判はバーテルス (Bartels, 1968a,b) によってドイツ地理学界に導入され、キール大会では前年に発表された彼の教授資格論文 (Bartels, 1968a) が学生たちの主張の理論的背景をなすものとなった。

学生からの批判は地理学全体に向けられたが、なかでも鋭く批判されたのはラントシャフト学の全体性についてであった (Wirth, 1987)¹⁰⁾。ガンザー (Ganser, 1970) も応用地理学の立場からラントシャフト学をとくに批判したが、地理教育では地誌中心の教育に対して鋭い批判が向けられた (Schulze, 1970)。しかし、上述したように、大学における地誌研究はすでにそれほど重要性をもたず、地誌学に対する批判はそれほど大きいものとはならなかった (Bahrenberg, 1996)。

伝統的地誌学に対する批判をまとめると、主として次の4つに区分される (Blotevogel, 1996b)。
①地誌学は資料を集めて記述するだけで、科学とはいえない。論理実証主義者や批判的合理主義者は、実証的な内容豊かな説明のために理論構築が学問の任務であると主張した。
②地誌学には社会的有用性が欠如し、社会的に実践すべき問題に乏しく、教養的な象牙の塔に固執したものである。ただし、1890～1930年における古典的な地誌学パラダイムの発生期には、政策や教育にとって地誌は重要であった。第2次大戦後や1967～74年の行政改革期にその適合性を失っただけであり、この批判は妥当しないとブロートフォゲルはみている。
③地誌は環境決定論に通ずる。自然と人間間の関連性がとくに意識され、近代社会では妥当しなくなった伝統的な地誌学の基本原理が示されている。事象間の因果関係や機能的関係を「空間の中で」示すことには問題がある。
④地誌学は潜在的に「小世界的世界観 (parochiale Weltsicht)」をもつものである。伝統的な地誌研究にとっては種々の空間単位を理解することが目的であり、それは空間的に細切れの自然的社会的単位として秩序づけられたモザイク的な世界像を考察することになる。このような自然条件の上になりたつ一体性を欠く世界像の考察は、近代以前の伝統的社会にとっては妥当性をもっていたが、今日では、空間的結合関係の発達と空間形成過程に生ずる軋轢を無視する点で不適當なものといえる。

キール大会の大学地理学教師に与えたショックは強烈であった (Popp, 1983)。その後10年間には学生たちが提示した命題が熱心に討論され、地理教育においてはカリキュラムや学習計画の改訂が行われ、地誌的部門は大きく後退した。そして、地誌学の賛成者は黙して語らず実践的な場でのみ議論を展開し、理論的には前進しなかった。ただしこのなかに

あっても、次第に変化が現れ、総合的なラントシャフト(Landschaft)に代わってゲオシステム(Geosystem)、地誌学(Länderkunde)に代わって地域地理学(regionale Geographie)¹¹⁾が鍵概念として登場した。

しかも皮肉なことに、地誌(書)の出版は1969年以前にも増して多くなった。ダルムシュタットの科学的地誌(Wissenschaftliche Länderkunde)シリーズでは20冊(7,781頁)が刊行されたし、46冊が科学出版会(wissenschaftliche Buchgesellschaft)のカタログに刊行予定されている。またクレット社(Klett-Verlag)のレンダープロフィール(Länderprofile)シリーズでは1977年以来12巻が刊行され、フィッシャー社の地誌シリーズ(Fischer Länderkunde)でも1970~78年に9冊が出版され、この3社以外にも多くの地誌(書)が刊行された。

もちろん、地誌学に対する多くの批判は地誌の執筆者に方法や様式の上でなんら影響しなかったというわけではない。しかし、地誌学のあり方を論ずる理論家と地誌の執筆者とは同一人ではなく、刊行された地誌(書)のなかでは地誌学の科学理論についてはなんら説明されなかった。最近の地誌の多くは読者に新鮮な印象を与えており、完全に定式化しているわけではないが、新しい目標を示している。したがって、バーテルス(Bartels, 1968a)やハルト(Hard, 1973)の批判は伝統的地誌に向けられたものであって、新しい地誌研究に対しては妥当しないと考える人もある(Popp, 1983)。

また、地誌(書)には地理学者以外の人たちによって書かれたもの(nicht-geographische Länderkunde)があるので、これについても触れておきたい。それらは地理学者の目からみると、次のような特徴をもつ。①これらの地誌の関心はその国の社会的文化的な構造に限定され、自然地理的内容には触れないし、また当該社会を主観的に評価したものである。②自然地理だけでなく地理学的テーマについても大幅にカットされており、科学理論的な論議や教育面からの要求とは全く異なっている。また、農業、工業、人口移動など地理学的テーマが扱われたとしても、その空間的關係については考慮されていない。③彼らの扱う国や地域はその数において限定され、外国語教育との関係からイギリス、フランス、北アメリカ、ラテンアメリカなどに限定されている¹²⁾。④文化科学的な文献学的地誌には、その目標と内容に関するコンセンサスが欠けている。また、これらの地誌(書)によって抽象的知識目標がいかんして達成されうるかについての説明がなく、学問的な発展性が乏しいし、地理学的地誌に対して重要な学問的基盤を与えることもない。⑤地誌からえられる知識や見方は、単に学問や言語教育に限定されるものではなく、常に規範的な社会政治的文脈に根ざしたものである。地誌はドイツに居住するものにとっての政治的教養である。⑥最後に最も重要なことは、文化科学的な文献学的地誌も政治社会学的地誌も共通して、1国を理解しようとしており、解釈論的に知識をえることに努めている。

このように、地誌研究は今日学際的な関心事であり、地理学だけがそれについて発言することはできない。したがって地理学は、地誌研究に対していかに貢献できるかを明らかにしなければならない。ポップ (Popp, 1983) によると、地理的地誌は1国の理解であり、1国における人間行動を理解することに貢献すべきである。例えば、シェラー(Schöller, 1978) は国家や国民、文化や社会を具体的にその生活実態のなかで捉え、それを彼ら独自の空間に関する発展条件から理解し注目することが、地誌研究の目標であるとして問題指向的地誌 (problemorientierte Länderkunde) を提唱した。その際、地理的地誌のなかで具体的に扱うものとしては、①内容の空間的広がり と 分化 (choristisch な側面)、②空間的結合関係 (chorologisch な側面)、③住民の価値感とか考え方、必要性など目に見えない要素、④意思決定担当者による空間現象の評価、⑤利用権者の決定に基づく空間発展、があげられる (Dürr, 1979)。

したがって、伝統的地誌の正当性については今日もはや支持できないが、地誌研究の必要性は完全に否定されたものとはいえない。ヴィルト (Wirth, 1987) も上記のポップ (Popp, 1983) と同様にキール大会における地誌学に対する批判は、伝統的地誌学の概念規定に向けられたのであって、地誌研究すべてを批判するわけではないと考えている。ヴィルトは、伝統的地誌にとって重視されてきた全体性 (Totalität, Ganzheit) や本質の追究は無視しうるし、また百科辞典的資料収集である必要はないが、それでもって地誌研究自体を放棄することはできないと主張する。彼は、地誌研究は少なくとも広い意味では科学であると考えている。

このようにして、新しい地誌学に対する論議は1970年代末に始まった。それには、上記のシェラー(Schöller, 1978) の「現代地誌学の課題」やヴィルト (Wirth, 1978) の「地誌学の科学理論的問題」および『理論地理学』(Wirth, 1979a) などがあげられる。『理論地理学』においては、先述のポーベク・シュミットヒューゼン (Bobek u. Schmithüsen, 1949) とは逆に、経験的实际は最高度の多様性をもつので、学問的な努力はそれらを抽象化してゆく過程であり、最終的にはモデル構築を目指すものであるとする。したがって、地誌はモデル構築や抽象化の最初の段階に位置づけられる。その内容は1回限りで、個人的で、取り替えのきかない性格をもつ。第2段階には一般地理学が位置し、第3段階には理論地理学がくる。人文地理学の問題提起は「いかなる現象がどこに生じるのか」、「いかなるタイプの現象間にいかなる関係がみられるのか」であるが、理論地理学では「空間においていかなる現象の秩序パターンが存在するのか」が問題となる。ただし、ここでいう段階とは抽象化の段階であって、学問的重要性における上下関係ではない。

しかしこれについては、バーテルス (Bartels, 1980) やバーレンベルク (Bahrenberg,

1979b) との間に激しい論争を巻き起こした。ヴィルトはキール大会の判定は時を経て無効になったと確信するのに対して、バーテルスはキール大会での地誌学に対する評価をその発展の終局点と考えたからである (Heinritz, 1982)。バーテルスは、キール大会に不快の念をもって執筆されたヴィルトの著書を理論なき「理論地理学」とはげしく非難し、バーレンベルクも科学理論的には統合できないものを統合しようとしていると批判した。バーレンベルクの批判に対してヴィルト (Wirth, 1979b) はすぐさま反論し、批判的合理主義の主導者ポパー (Popper, K.) のアプローチに関する解釈の違いから生じたものとする。将来の地誌学の重要性は、認識論的考察においてではなく、その社会的有用性や必要性、説得力にあることを強調した。

ヴィルトは1978年の論文のなかで地誌学について次のように述べている。地誌学の任務は、あらゆる一般法則の向こう側に存在する現実世界の1回限りの実際の現象のなかにある、多くの興味深い問題を指摘することである。また、地誌の問題設定には著者にとっての興味ある問題や今日の学問からの要求課題があるが、その考察の中心には住民が直面する生活空間の諸問題 (Lebensraumfragen) が据えられるべきである。しかし、地域自体も変化し学問的な問題提起も変化するので、地誌は時代と結びついたものであり、歴史書のようにそれぞれの時代に応じて新たな地誌が書かれるべきである。

また読者を魅了する地誌には、一般記述や説明だけでなく、現象学的な記述分析手法が加わるべきであるという。それは著者の日常的な個人的な生活経験に基づくものである。そのような地誌は、帰納法の原則によって調査を行い統計的に評価する実証的方法ではなく、各人の主観を相互に追試し、著者自身が経験したことをその内容を知る読者に報告し、その印象について賛成をうるという方法によるものである。

「土地や人との長年の交わり」が現象学的考察の前提条件であるので、その点ではシュミエーダー (Schmieder, 1969) の方法はその典型といえる。しかし、現象学的分析は地理学の枠組にアクセントを追加し光沢と与えるものであって、地誌研究は現象学的分析だけではない。地誌の記述が芸術だといわれるのは、このアクセントや光沢に関係する。現象学的方法の本来の強さはそれを利用する人の経験やインテリジェンスなど「個人的な学識」に基づく。トゥアンは、「場所の本質を捉えることに成功した地誌は芸術作品だ。ある地域に関する生き生きとした描写は多分に現象学的地理学の傑作であるが、芸術的成功はそれに続くべきプログラムを用意しているわけではない」と述べている (Tuan, 1976)。

ヴィルトの『理論地理学』は、上述のように、反対者によって酷評されたが、地誌学の賛成者には注目された。それは、理論的に耐えられない余分な部分を投げ捨てて、将来の地誌研究の展望を示すものであった。そして、科学理論に基づく批判は、若干の地誌概念

に含まれる特定の理論的仮定に対してであって、地誌学自身に対して向けられたものではないとする。今日重要なことは、地誌学はいかなる理論的基礎のもとで学問的に認められるかであり、地誌研究の実用的価値は認められる方向にある。

それでは、地理学的地誌は科学理論的に正当化されるだろうか。今日たとえ批判的合理主義が地理学における基本的パラダイムとして支配的であるとしても、他のパラダイムも同じく権利をもつものとポップは考える。彼は、地誌学については少なくとも3つの立場があるとして次のように整理している (Popp, 1983)。

①一般地理学の応用としての地誌。一般的内容を特定地域に当てはめて考察する地誌が、今日よくみられる地誌研究の立場である。それは、一般地理学・理論地理学にとっての応用部門であり、検証フィールドであり、仮説提供者でもある (Dürr, 1979)。この場合には、地誌は独自の部門としては認定されず、「地誌は今日の大学での研究対象には属せず、学問の応用部門である」とみるバーテルス (Bartels, 1981) やバーレンベルク (Bahrenberg, 1979b) の見解とも一致する。

②法則定立的演繹法と特異な周辺条件 (singuläre Randbedingungen) の結合としての地誌。バーレンベルク (Bahrenberg, 1979b) は「地誌は、批判的合理主義の科学理論においては、個々の事件を一般法則的なものと特異な周辺条件から説明する点では歴史学と同様である」と述べているが、それはむしろヴィルト (Wirth, 1978) の立場である。そこでは特異な周辺条件を理解することが問題であって、それを確認し説明の中に含めるように努力すべきである。しかし、批判的合理主義哲学との関連において特異現象を説明する道は存在しないので、解釈論 (Hermeneutik) のような他の基本的パラダイムを必要とする とポップは説明する。

③個人の生活世界的な行動状況の分析としての地誌。ハインリッツ (Heinritz, 1982) によると、批判的合理主義の説明では説明変数の外側に、実用的な有用性をもちながらも説明されない大きな部分が残される。それを明らかにすることは実用的には重要なことであるが、一般地理学の知識はそのままでは計画に利用されないため、そのモデルを変形した個別の変数を認識し考慮することが大切である。因果的原理は人文科学には適合しないので、個人の生活世界の経験に基づく行動的場面 (Handlungssituationen) の合理的な再編が必要である。

バーテルス (Bartels, 1981) も晩年の論文では、地誌に対する社会的需要の存在やその社会的任務を認め、あくまでも学問の応用としてはあるが、地誌は教育や生活指向の学問には役立つとしている。そして、大学における地理研究では研究成果の準備や応用の2次的分野とみなされ、学問の伝統的要素としてとどまるべきであると述べている。また、

地誌学は地域地理学と改名して、学校教育を越えた世界像形成の用具として社会教育的課題に利用すべきであるともいう。この論文の中でバーテルスは、「商業的ジャーナリズムは体系的な教育的任務から逃れており、ジャーナリストを地誌的知識の供給者と考えるのは誤りだった」と述べており、大学の地誌教育に関する考えも修正するとしており、彼の主張には、少なくとも部分的には変化がみられたように思われる。

このようにして、1980年代の初めには地誌学に関する新たな発想がみられるようになった。ハインリッツが「1979～81年の2年間にドイツ地誌と考えられる論文を発表したか」というアンケートを大学地理学教師286人に送付したところ130人の回答があり、配布者の1/3以上(有効回答の81%)が地誌分野の研究に従事したという(Heinritz, 1982)。ドイツの大学では、教師の地誌的素養が重要視されることで知られているが(Lichtenberger, 1984; Bahrenberg, 1988; 森川, 1992)、依然として地誌研究の人気は衰えていないようにみえる。

3. 1980年代後半以後

キール大会以後時間が過ぎるにつれて、ドイツ語圏では地誌学・地域地理学に対する批判は下火になった。それは「現代社会科学の危機」と呼ばれるような基本的なパラダイム変化によるものと考えられる(Wirth, 1987)。それはまたポストモダン社会の到来とも関係する。今日のポストモダン社会は、もはや進歩に対するなんら共通の尺度も共通認識もなく、前進の発想自体も単一路線ではなくなり、さまざまな目標をもった社会である。学問的には、社会科学の自然科学化の時代は過ぎ去り、社会現象は特定の歴史的発展条件、特定の地域構造のもとで説明される時代に移行してきた。

政治的・経済的には、時間・空間の加速や短縮ないしは完全撤廃というかたちでグローバル化が進行しており、国独自の決定は困難となり、国際的変化が地域に直接浸透するようになってきた。それはまた、地域のルネッサンス(Renaissance des Regionalen)と呼ばれるような地域主義を強調するところとなった。いまや郷土団体、郷土文学、地域的メディア、さらには郷土料理までがブームとなり、文化や意識の地域差が経済発展の差異に通ずるところから、EUにおいても域内諸国においても地域の開発や振興が重要な政策対象となっている(Danielzyk u. Ossenbrügge, 1993; Blotvogel, 1996a)¹³⁾。

国家権力の縮小と地域主義の発達、同時に国内における生活条件の均等化への努力を怠ることにもなる。新しい発展モデルのもとでは等質社会(homogene Gesellschaft)の建設という発想は後退し、社会分化の強化と個人個人特色ある生活様式の発達を通じて連帯社会の様相は薄らいできた。EUの市場統合により資本投資をめぐる地域間の競争は激

化し、地域の代表者たちが独自の発展の道を構想する時代が到来した。

こうしたなかで、旧西ドイツの地理学はますます細分化の方向に進み、地理学内部相互間の協力よりもそれぞれ隣接科学との緊密な協力関係が発達してきた。したがって、大学の地理学教室では全く異なった研究分野が辛うじて共通の研究コースを維持するような組織となっている。バイロイト・ミュンスター両大学では地（景観）生態学のコースが地理学から独立しつつある。地理学者の方でも地理学者というよりも好んで都市研究者、気候学者とみるように自己アイデンティティが変化している。人間と自然の調和という地誌学パラダイムの有効性を喪失した今日、地誌学は地域的知識の収集、加工、記述として理解されてはいるが、研究課題に関する一体性は欠けている。大部分は隣接する学問分野から生じた知識の単なる仲介者に成り下がりがつつある。こうした状況下で、ブロートフォージェル (Blotvogel, 1996b) は地誌学が記述的課題としてだけでなく、研究課題としていかに理解されうるかという問題には大きな不安があると述べている。

1993年には「秘密に満ちた地理学者」という記事が『ツァイト (Die Zeit)』紙に掲載された (Schmidt, 1993)。通常の科学は1つの構造核とそれに付随した応用部門をもつことによって存在権を確保しているが、地理学にはそれが欠如している。学際的協力を行うにしてもまずは学問的専門領域をもつべきで、他の学問からそれを知られないで地理学者として学際的研究を要求するのは無理である。学際的協力を進めるよりも前に、その専門固有の貢献はなんであるかを知らねばならないというのがその主旨であった (Pohl, 1993)。

1990年代初頭の統一ドイツにおける地誌学理論においても、論議の不統一と矛盾の多さが目立った。ブロートフォージェル (Blotvogel, 1996b) は当時のヨーロッパの地理学の状況を次の4つの対立にあるという。すなわち、①旧東西両ドイツの地理学者の間には、地誌学に対する評価は大きく異なっていた。それは、両国地理学者における理論検討の差異と国際交流の違いにあった。②科学的地理学による地誌学の過少評価と多数の地誌刊行物との間に矛盾がみられた。上述のように、地理学の歴史のなかでは今日以上に多くの地誌が刊行された時代はないといわれるほど、幅広い需要が生じた。③アングロサクソン諸国やオランダ、フランス語圏における新しい地誌学に対する活発な議論¹⁴⁾とドイツ語圏における著しい沈黙との対立がある。ドイツ語圏では多くの地誌は書かれるが、概念的考察は不足している。しかもドイツ地理学者のなかには西の隣国を依然として地誌学の伝統の乏しい国々とみなす人が多い。ドイツにおける地誌学理論に関する議論の欠如は、1970年代における激しい議論後の疲労現象ともみられる。④社会科学指向の地理学者と自然科学指向の地理学者の間には幅広い対話の不足がみられる。最近の地誌（書）は自然地理学指向と人文地理学指向とに区分され、自然・人文両分野にまたがる伝統的なパラダイムはその

中心的地位を失ったように見える。

しかしこうしたなかでも、1980年代以後のドイツの地域研究を特徴づけるものの1つとして地域意識 (Regionalbewußtsein) の研究がある。ドイツでは高速道路の建設や空港建設など公共事業に対して地元民の反対運動が高まり、人々がどのような空間意識をもっているかが重要な関心事となり、さらに空間整備政策においても内発的ポテンシャルや自立的な地域発展が取り上げられるようになって、地域意識や空間的アイデンティティが重要な研究対象となってきた。地域意識の研究は以前にもみられたが、特に注目されるようになったのは1983年に結成された学会作業グループ「地域性 (Regionalität)」によるプロートフォーゲルら (Blotevogel, *et al.*, 1986) の研究以後である。

また、最近のドイツ地理学における大きな変化として、論文の引用文献のなかに英語やフランス語の文献が多くなり、研究視角や研究方法が国際化してきたことがあげられる。それとともに地理学・地誌学に関する新しい動きも感じられる。1993年の *Erdkunde*, 47巻には「空間なき地理学は存在する(存在しうる)か」と題するヴェアレン (Werlen, 1993a) とポール (Pohl, 1993) の2篇の論文が発表された。

ヴェアレン (Werlen, 1988) ではポパー (Popper, K.R.) の社会科学方法論を踏まえて、バーテルス (Bartels, 1968a) が地理学を「行動指向的空間科学 (handlungsorientierte Raumwissenschaft)」と定義したのを「空間指向的行動科学 (raumorientierte Handlungswissenschaft)」とすべきであるとしたが、本論文 (Werlen, 1993a) はそれをさらに前進させたものといえる。それは、空間・時間意識の空洞化 (Giddens, 1992, S.26) したポストモダン社会の人々の行動様式 (Handlungsweise) では、空間的条件は重要ではあるが、今日の社会は空間的カテゴリーによって研究すべきではなく、国とか地域、空間それ自身は人文地理学の適当な研究対象ではないというのである。地理学は空間という研究対象なしに考察することによってもその正当性が危機に陥ることはなく、種々の力によって「行動する主体 (handelnde Subjekte)」が日常的に生産し再生産するものが地理学の研究対象となるべきである。すなわち、空間は地理学研究の対象ではなく、ある特定の社会空間的条件のもとでの人間活動 (menschliche Tätigkeit) が対象となるべきであると主張する。ヴェアレン (Werlen, 1993b) はさらに同年に発表した『日常的地域化の社会地理学』と題する上下2巻の著書の下巻には「地域地理学から日常的地域化へ」という副題を付している。

このように、ヴェアレンは空間の代わりに「行動する主体」を対象とすることによっていかなる権限も喪失しないとするが、後者のポールは、そうした地理学に疑問を抱いている。ポールによると、われわれ地理学者はたしかに空間的見方をしており、地域差を追究

し、空間構造的な問題に視線を向けている。しかし、空間的見方は地域社会学でも地域経済学でももっているもので、ヘットナー(Hettner, 1927, S.125)のように、歴史学の時間科学に対して地理学は単に空間科学(Raumwissenschaft)であるというのは無意味である。地理学者が社会的に価値ある貢献を通じて生存権をうるためには、その対象とする「空間」をなんらか理論的方向に高めなければならないと主張する。

今や空間の有用性が地理学以外の学問においてもますます強く認識され、空間的側面との関係が重要視されるようになってきたことは、地理学自身がより注目されるようになったことを意味する。そのこと自体は歓迎すべきことであり、空間の再発見は地理学の発展にとって大きなチャンスではあるが、同時にまた、隣接科学の空間認識が高まることは地理学の正当性が危機にさらされることでもある。地理学以外の学問の中でも新しい空間概念が現れてきたが、これらの概念は、社会経済科学における行動中心的な基本的見方に背を向けてきた地理学にとっても有用なものである。

したがって、地理学のなかで空間理論に関する論議が始まらなかったとしたら、隣接科学によって「理論的に」従属させられる危険性がある。例えば、多次元分析(Mehrebenenanalyse)は地理学ではほとんど認められていないし、構造形成過程における生産的メカニズムの尺度性の問題についても地理学の貢献はない¹⁵⁾。したがって、地理学はバンジ(Bunge, 1962)でもって始まった理論的論議を継続しなければならない。今日の地理学からその対象である空間理論を除去したならば、単に百科辞典的な地誌研究や大衆科学(folk science)の任務だけにとどまる危険性がある。ポール(Pohl, 1993)の論文では地誌学について直接的には触れていないが、空間理論の発展を重視する文脈からすると、ヴェアレンと同様に、地誌研究に対してはそれほど期待していないように思われる。

III. 地域概念の展開

地誌学は地域地理学といわれるように地域を対象とした学問であるので、地域がどのように考えられ把握されているかは最も重要な問題である。隣接科学の間では、地理学は明確に規定された地域概念や地域理論をもっているものと考えられているが、専門的議論が深まるにつれ、また現在に近づくにつれて、地理学の地域概念はますます不明瞭なものになっている。本章では、主としてプロトフォーゲル(Blotevogel, 1993; 1996a)によって地誌学・地域地理学の中心的概念である地域の考え方についてその変遷を探ってみることにする。

伝統的地理学では、地域は「中規模のスケールをもって真に存在する地表空間的単位」

であった (Whittlesey, 1954; Juillard, 1962; Lehmann, 1973)。そして、地理学はこの空間的単位を記述し、理解し、発生論的に解釈したり理論的に説明しようとしたが、今日ではもはや時代遅れなものとなっている。地域は規模的には中規模の空間とされるが、これはあくまでも空間の形態であって、本質的な内容的な意味をもつものではない。今日では、EU とか NAFTA など多くの国々の連合体として使用する場合も増加している。

地域概念は、1960年代までは地理学者や空間計画家の専門用語として限定されていたが、1970年代には行政改革や地域的論争を通じて政治的議論にも用いられるようになり、1980年代・90年代には、前章でも述べたように、①郷土の再発見とその新たな評価、②郷土史や地域史、さらには地域方言に対する社会的評価の上昇など地域文化の再生、③新聞・ラジオなどのメディアを通じての地域に対する要求の高まり、④生態的計画・生態的政策など、地域は政治や一般市民にも広く用いられ、多くの学問の流行語となってきた。とはいえ、その使用内容は分野ごとに相違し、全く同一の意味において使用されているわけではなく、地域は玉虫色の概念といえる。

ビルケンハウアー (Birkenhauer, 1984) は地域を、①全体的特性をもった国、②自然地域、③起伏によって分類された地域、④文化圏、⑤機能地域 (結節地域)、⑥計画地域の6種類に区分したが、プロトフォーゲル (Blotevogel, 1993) は空間 (Raum) を哲学的な意味において整理し、第1空間から第7空間まで7類型に分類している¹⁶⁾。このうち地理学では、第4空間 (相対的空間) は距離を中心として扱われ、第5空間 (人間に対する自然環境としての空間) は前世紀から地理学の対象となり今日でもエコシステムの問題として扱われる。さらに、第6空間は主観的に経験され認識された空間 (主観的空間) であり、「生かされる空間 (gelebter Raum)」や価値観空間 (Anschauungsraum)、行動空間として発展した。社会地理学においても主観的空間は重要であり、社会集団の支配的な価値観や規範とともに主観的考慮が加えられた。第7空間は社会空間・経済空間であり、社会空間は主観的空間と同様に、地表空間を最初から構成するものではなく、以下に述べるように、社会的な構築物の1断面であるとする。

ところで、理論計量革命のときには地域概念をより正確に理解しようとする試みがなされた。当時の議論のなかには、地域はただ1つだけ存在するのか、また現実に存在するのか、地域は分類学的に体系化されるのかが問題になった。伝統的な地誌学では、上述したように、「実際に存在する全体 (real existente Ganzheit)」としての地域が研究対象であったが、1960年代・70年代には地域は対象を空間的に秩序づけるための分析上の構築物 (analytische Konstrukte) であると理解されるようになった (Birkenhauer, 1984)。すなわち地域は、学者がその研究対象を体系化するための分析用具として頭の中で作られたも

のであり、学問的な概念や仮説を実証する試験管として利用されるものである。

それは、特定の理論や目的によって導かれており、あらゆる目的にかなった地域が実際に存在することはありえないことを意味する。つまり「地域はそれぞれの目的やそれに関連した地域化のための尺度によって形成される」ものであり、その限りにおいて、地表について「正しい地域区分が1つだけ存在するのではなく、目的ごとに異なり、原理的に限定されない多数の地域区分が存在する」のである (Bahrenberg, 1988)。地域は地表上にも立地しうるのであるが、今日的な地域は、むしろ非連続で異質的で、あまり明確には境界づけられないものであり、地表全域を覆うかたちで地域のモザイクを求めることはできないと考えられるようになった。

それとともに、上述したように、人文地理学では空間概念や人間の精神的世界、社会的世界にとっての空間の役割について幅広い考察が始まった。活動地域 (Aktivitätsregionen) は個人やグループによる人間行動や社会組織 (企業、自治体など) の行動によって形成され、社会的コミュニケーション (対面接触, マスメディア, 政治, 文化) を通じて知覚地域やアイデンティティをもった地域 (Wahrnehmungs- u. Identitätsregionen) が形成される。そうした地域や空間は自然的な地表空間ではなく、社会的コミュニケーションによって認識されたものである。そして、日常的認識やメディアによる認識をもった空間像は、地域的アイデンティティ形成の媒介や手段として重要な役割をもつ¹⁷⁾。その場合の地域は、一方では精神的社会的な構築物であり、個人的な社会的アイデンティティ形成の1局面であるが、同時にそれはまた、目的の合理性と権力を表現する手段ともなる。

以上のような種々の地域概念をプロートフォーゲルは第1図のように整理している。従来から考えられてきた「現実の地域」のほかに、「活動地域」と「知覚地域」が加えられているところに特徴がある¹⁸⁾。

ここでわれわれにとって特に重要なのは、第1に、空間というカテゴリーが現実の社会再編に内包されたものであり、それは所与の自然空間であるとともに社会空間 (gesellschaftlicher Raum) でもあるということである。その限りにおいて、空間構造は社会再編の単なる条件や結果ではなく、社会的再編と切り離すことのできない部分である。第2に、地域という空間的基準がフォーディズムからポストフォーディズムへの移行のなかでその評価を高めることとなったことである。前章で述べたように、経済、情報、文化などの国際化したポストモダン社会においては、ヴェアレン (Werlen, 1993a) は空間的分化は意義を失い、「空間的に固定されない状態となった (räumlich entankert)」と考えたが、彼とは異なって広域的世界的な結合の中においても、地域は政治的行動の空間として存在するものと考えられる。すなわち、①国家理論・組織理論のもとで階層的組織をもって形成

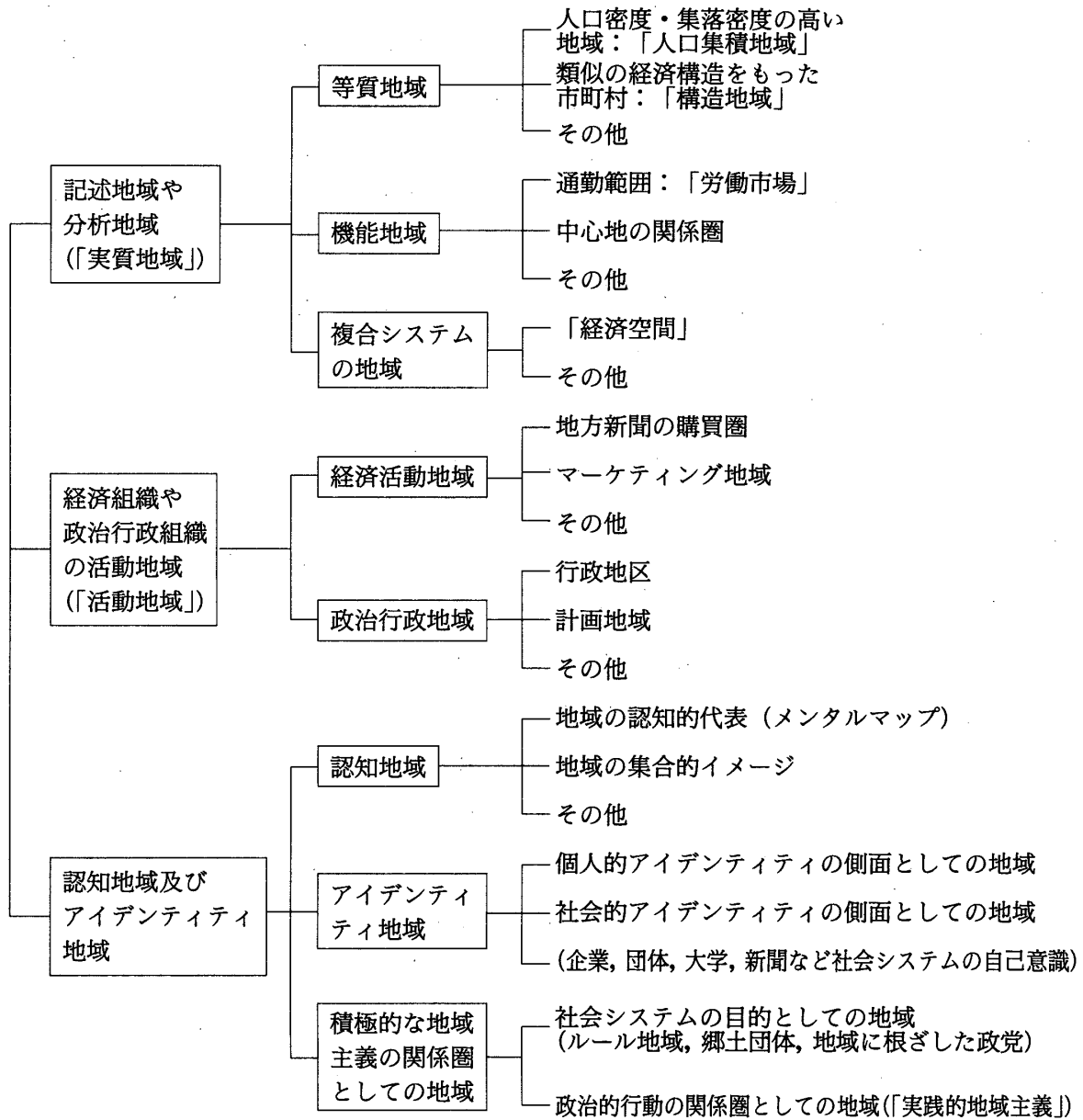


図1 プロットフォーゲルによる地域類型試案

出典：Blotevogel(1996a)による (一部修正)

された中央集権国家は、複雑な課題の克服のためにもはや能力の限界に達しているのに対して、地域的な分散的組織は柔軟に対応できるものであり、②地域に基づく種々の成果は経済的に説明されるだけでなく、領域的に固定 (territoriale Einbettung) したものである。

ところで、地域理論においては、図1に示すような地域概念の分類だけでなく、種々の地域タイプ間の複雑な関連性や相互作用が問題となる。新しい理論に関する議論のなかでは、ニール (Nir, 1989) やスターン (Stern, 1992) のように¹⁹⁾、一般システム理論によって説明したものがあ。しかし、そのアプローチは地理学の自然・人文科学的見方の間の

結合を約束する点では地理学にとって魅力的であるが、形式的で内容的には乏しい。これらの概念は実証主義的伝統に立って、地域の社会的性格に関する見方を閉ざしたところにも問題がある。

上述のように、地域が精神的・社会的に構築されたものであるとする発想は、伝統的地域概念を大きく拡大させることとなった。しかし、そうした構築物の内容的特性については実はあまり知られていない。イギリスのロカリティ・スタディ(locality studies)には多くの批判があるし(Danielzyk u. Ossenbrügge, 1993), プレッド(Pred, 1984)らの歴史的な地域形成はそのまま現代には通じない面がある。その点では、パーシ(Paasi, 1986)の地域を社会的な再構造化の1部とみる研究が注目される²⁰⁾。彼は社会構造や人間行動の相互作用の場(place, Ort)としての地域を示し、それと伝統的な地域理解との間の差異を指摘した。その場合に、プレースは個人的行動の生活世界レベルを強調するのに対して、地域は主に制度的実践や超個人的な歴史という集合的レベルに関するものである²¹⁾。彼は、地域を「直接には経験できないが、政治、文化、法律、その他の制度やそれと関連した力関係を通じて、象徴的意味において個人の生活に現れる全体」と理解している。

パーシによれば、地域が歴史的社会的現象として把握されるとき、地域の形成過程が研究の中心的テーマとなるべきである。社会空間的地域の形成過程は、①テリトリーの発生(境界設定)、②シンボリック形態の発展(例えば地域の命名)、③施設・制度の発展(日常施設の設置)、④地域意識の発展という4段階に区分される。しかし、地域はある段階の社会過程におけるまとめりであって、地域が共通の地域意識や地域アイデンティティをもつことについては問題がないとはいえない。地方新聞、マスメディア、地域住民、他地の住民、労働者クラス、インテリ層、地元政治家などのうちの誰が地域意識を規定するのか。彼らすべてが共通の地域意識をもつことは希であり、それぞれの組織や団体は彼らの要求に適合する地域を生産することになる。またたとえ共通の地域意識が存在したとしても、そのような地域が地域内の社会的経済的政治的な軋轢を減少させ、外圧から逃れて直面する地域問題を解決する助けにはならないと考えられる(Bahrenberg, 1993)。また、パーシの地域形成過程の説明は1つの形態を説明したものであって、すべてがこの過程をたどるとはいえないように見える。

地域概念の考察の結論として、プロトフォーゲルは次のように述べる。今日でも自然地理学者にとっては地域は依然として「物的に充填された地表面」であるが、ポスト実証主義の人文地理学者においては社会システムの空間関係や社会文化的な地域構築物(Regionskonstrukte)を地域と考える。したがって、地理学内部において自然・人文地理学間に意志の疎通問題が発生し、世界についてある一定の展望をもつ地理学者として共通

の「空間的眼鏡 (räumliche Brille)」が失われたのは問題である。しかしその反面、地域形成、地域生産、さらには地域経営や地域マーケティング (Regions-Marketing : 各地域の経済的価値評価) などの問題を考えることは、基礎科学にとってだけでなく多くの人たちにとって関心の的であり、共通のテーマを開くチャンスでもあると。

IV. 地誌研究所の創設とその役割

将来見通しのきかない今日の状況下で、1992年1月1日に地誌研究所がドイツおよびヨーロッパの地誌研究の中心的な施設として創設された。これは統合後、旧東ドイツの科学アカデミーを廃して成立した「地理学・地生態学研究所」を継承したものである。地誌研究所の創設は地誌学の目標や社会的意義などとも密接に関係しているので、以下において成立の経緯や目標、活動状況などについて詳しく紹介することにする。

1. 地誌研究所の創設

1990年秋にはヘムペル (Hempel, G.) 教授を代表とする地球科学評価委員会が「地理学・地生態学研究所」を訪ね、「地誌研究所」なる次期研究所の創立を学士院 (Wissenschaftsrat) に推薦し、学士院はこれに同意した。連邦と州は学士院の投票結果には従う義務があるので、地誌研究所は連邦とザクセン州の共同出資による研究所として創設されることとなった。ただし、実際の移行措置を行うのは1991年7月にザクセン州から召集された地誌研究所創設委員会であった。これには連邦とザクセン州の代表の他に7名の地理学者が参加し、ブロットフォーゲル (Blotvogel, H.H.) 教授が委員長を務めた。同委員会は切迫した時間のなかで研究所の構成や定款をさだめ、35人の研究所員の配属を決定したが、創立構想 (Gründungskonzept) は著しく遅れて1994年3月4日に同委員会の最後の仕事として発表された。

ブロットフォーゲル (Blotvogel, 1996b) によると、学士院の地球科学委員会は主に地理学以外の地学や環境科学の研究者からなり、彼らは地理学や地誌学について漠然と理解していただけであった。委員会の決定では、地誌研究所はどうしても必要な施設というわけではなく、「地理学・地生態学研究所」の1/3の所員をもって1つの後継施設を定めたに過ぎなかった。とくに若干の委員が図書館の状況や収録された研究資料—たとえば極地研究者のドリガルスキー (Drygalski, E.von) の収集資料—に興味を感じたことが、創設にとって重要な役割を演じた。しかし、貧弱なスタッフでもって地理学の全領域をカバーする総

合的な地理研究所を創立するのは困難であった。しかも当時すでに環境研究センターの設立が計画されており、地（景観）生態学の伝統はそれに継承されることになっていた。その他の自然地理学関係の施設はポツダムの専門研究所と競合するし、地域計画部門はハノーファーの空間整備・国土計画研究所 (ARL) やバートゴースベルク (ボン) の国内地誌・空間整備研究所 (BfLR ; ベルリンに支所立地) だけでなく、ドレスデンに計画中の生態的空間開発研究所 (IOER) とも競合することがわかっていた。

こうした状況下で、1968年まで存続したドイツ地誌研究所 (Deutsches Institut für Länderkunde)²²⁾の古い名称にちなんだ地誌学研究所を継承施設しようという発想がにわかには浮上し、各委員の合意がえられた。したがって、この提案は研究所の重複を避けるためであって、積極的に地誌研究を推進しなければならないというものではなかった。各委員が敏感に反応したのは、新研究所の創設によって生態学などの内容が分断されるとか、地理学の総合的見方が個々の分析科学にいかにか影響を及ぼすとかいう自分たちの学問領域に直接利害が及ぶ場合であった。各委員は、上述のように地誌学の研究所が具体的になにをしようのかなにをなすべきかについて十分に正確な知識をもっていたわけではないが、地誌学を真に地理学的なものとして理解していた。

このような決定に対して、地誌研究所創設委員会委員長プロートフォージェル教授は諸手をあげて賛成したわけではなかった。それは前身の地誌研究所の伝統への接近に対する誤解が生じないかという不安からであったが、地誌学という名称を避けて、例えば「連邦と州による地域研究・国内地誌研究所 (Bund-Länder-Institut für Regionalforschung und Landeskunde)」とか「ドイツおよびヨーロッパの国土・地域研究所 (Institut für deutsch-europäische Landes- und Regionalforschung)」のような新たな名称を掲げる場合には改めて面倒な説明が必要であり、他の研究所との調整問題も予想された。それに対して、地誌学とはなにかそれはどうあるべきかという問題は、説得力ある研究成果によっていずれ解決されるだろうと考えられた。

上述のように、当時の創設推薦者が考えていた地誌学の研究目標は漠然としたものであった。しかし、少なくとも隣接科学の人たちは今日なお地理学のパラダイムの中心をなすものと考えていた。また、地誌研究所の課題決定が漠然としていて未解決なこともかえって幸いした。課題の正確な決定は、研究所の設立後の問題として創設委員会や研究所自身に委ねられていた。それは学問の自由という特許状をえたからではなく、他のすべての連邦・州共同出資の研究所 (Blauen-Liste-Institute) と同様に、研究成果について近いうちに改めて学士院の審査を受けることが予定されたためである。

ところで、本研究所創設に対する地理学界での反応はさまざまであった。バートゴース

スベルク(ボン)の地誌研究所が1968年に今日の地誌・空間整備研究所に統合され、マイネン(Meynen, E.)の後継者ガンザー(Ganser, K.)やシュトゥルーベルト(Strubelt, W.)のもとで計画科学・社会科学への研究方向を明瞭に打ち出した後に、地理学の中核をなすと思われる地誌研究所が創設されたことについては喜ぶ人ばかりではない。

地理学者の反応には4つのグループがある。第1のグループは伝統的立場を重視する「信念をもった地誌研究者」からなる。彼らは1970年代に反対方向に前進しようとする人たちの攻撃によって大きな痛手を受け排除された後、理論的な検討にはあまり関与することなく、自分たちの地誌研究を黙々と続け、地誌を書いてきた人たちである。「地誌学的反革命(länderkundliche Gegenreformation)」を期待していた彼らが大きな喜びをもって受け止めたことはいうまでもない。

第2は地理学の科学的近代化の推進グループで、彼らは1970年頃の方法論に関する議論から法則追求的・理論構築的な科学を目標とし、地理学者としてアイデンティティをもつよりも各専門領域を指向する人たちである。これらの人たちには地誌研究所創設の利益はほとんどなく無関心を装っていたが、多くの人たちは科学的転向以前の古い地理学への復活とみてネガティブな反応を示した。

第3グループは社会政策に従事する人たちで、地誌研究には批判的な地理学者である。彼らは地理学を批判的な社会科学ないしは環境科学と考える。彼らは、ポストマルキストとして社会空間的不平等や環境問題、第三世界の低開発性、女性地理学などに対して興味をもち、学問の社会的有用性を強調する。その点から、「地誌学」という概念にイデオロギー的な疑念を抱く人たちである。地誌学はせいぜい無害な古好みの市民的教養の学であり、場合によっては、支配権力や帝国主義的拡大を意図する用具ではなかったかと考えている。

第4グループは「思慮ある懐疑派(reflexive Skeptiker)」と呼ばれる人たちで、プロトフォーゲル自身も個人的心情としてはこのグループに属する。彼らは2・3年から10年の間理論やメタ理論に関する議論の経験をもっており、ウーリッヒ(Uhlig, H.)からヴェアレン(Werlen, B.)に至るまでの規範的地理学の設計図に関しても、それしか他の道はなかったとする構想設計図には疑念を抱く人たちである。彼らにとっての学問とは、責任を意識し、創造的で、理論追究的で方法論的にも制御された知識の生産である。彼らは地誌研究所の創設を懐疑と楽観の交差のなか一半々の比率ではなく一でみている。懐疑的というのは、伝統的地誌学への回帰に関してであり、単に事実記載を主とし、方法論的には未熟で、潜在的に環境決定論を支持するような地誌学は消滅すべきであるとみる。一方、楽観的というのは、新たな考察の対象である国、地域、ラントシャフト、空間のなかに新

しい研究展望が開けているという点にある。

いずれにせよ、地誌研究所という名称のもとで任務の決定が比較的自由に行われることは、危険でもあり同時にチャンスでもあると考えられる。

2. 研究活動に関する展望

新しい地誌学をいかに構想し具体化するのかについて明確に答えることは困難であるが、以下の問題点をあげることができる (Blotvogel, 1996b)。

①地誌学の学問的任務は決して時代遅れのものではなく、以前と同様に今日的な使命をもつものといえる。地理学内部からみると、地誌学は常に地理学のパラダイムの中核的なものであった。地理学の研究はその部分領域において系統的な隣接科学と重複することによってしばしば深刻な問題を生じたが、「中心」としての地誌学がそれらと競合することはなかった²³⁾。しかし、1970年代・80年代における学問的な近代化は隣接科学との接触のために必要ではあったが、最終的には統一科学として地理学を分解へ向かわせ、パラダイムの中核を失わせることとなった。したがって、そのような中核の支持力を失った学問が今後維持すべきかどうかという深刻な問題が生じている。

②地誌学は社会的要求 (gesellschaftliche Bedarfslage) に今日でもよく対応している。しかしそれは、国や州、郡などの既存の空間構造や空間組織に対する無批判の弁護や地域的アイデンティティ形成者を単純に支援することによって、さらには地誌や空中写真アトラスの出版など商業的利益を通じて、社会的需要が存在することととり違えてはならない。それは学問の役割に関する問題であり、ここでいうのは、空間的構造化や空間的再構造化に対してである。パーシィ(Paasi, 1986) が述べるように、地域形成過程 (Regionalisierungsprozesse) の考察は政策的にも有用である。空間政策に対して批判的考察のもとに執筆された地誌やアトラス、写真判読などの刊行は決して無価値なものではない。

③ヘットナーやラウテンザッハ、コルプ (Kolb, A.) など古い巨匠たちとの単純な結びつきという意味での「地誌学的反革命」は不可能であるばかりでなく、地誌研究所にとっても地理学にとっても不幸なことである。この命題は、伝統的地誌学の経験論や単純な解釈論が認識論的な断絶 (rupture épistemologique) によって純粋さを失った1960年代・70年代以後における学問的理解の変化から説明される。学問には重要な理論的方向性と方法論的考察において、どの学派も反論できないような絶対的な共通分母が存在するが、その点からいっても伝統的地誌学は貧弱であった。空間的内容に関する収集と記録、記述は研究とはいえ、せいぜい学問の予備教育段階 (Wissenschaftspropädeutik) に過ぎないものとしてしか評価されない。地誌(書)やアトラスなどの刊行物においても、オリジナルな研究活

動は少なく、第2次・第3次情報の収録に過ぎないものであった(もちろん、これは利用価値がないということではない)。地誌学は事実の採取・狩猟の段階を越えて研究課題として理解されねばならない。それは、新実証主義や社会批判を目標とした地域研究としてまた地域生活の解釈論として、創造的な問題提起、理論指向、方法論的考察をもって構想されるべきである。

④空間、国、ラントシャフト、地域などの術語は近代的地誌研究においては不明瞭で、理論構築には不適當である。それが平凡な空間的意味において自然的表面として理解されるときには、ラントシャフトや空間概念をめぐる論議から内容豊かな研究を導出することはありえない。伝統的地誌学に含まれる調和的な人間・自然パラダイムの評価は高くなく、時宜に適したものとしてさらなる発展を期待することはできない。

⑤地誌の研究計画においては、その内容的なテーマや理論的方向、問題提起はまずもって与えられるのではなく、総合的観点から決定され説明されるべきである。従来の研究では、国、地域、空間、ラントシャフトなどの研究領域が前もって与えられており、地誌研究はその問題提起がいかにして発生したかについて説明するには及ばないと考えられていた。地誌学における問題提起は伝統的に比較的控え目であり、事実の表現と記述にのみ関心が集中してきた。伝統的地誌学は実証を重んじ理論を軽んずるという非対称的な構造をもってきた。地誌学の問題提起や理論は定式化されるべきであるが、その解答は今日なおえられていない。創設構想には若干示されてはいるが、一貫した地誌学の研究展望を示すには十分な時間がなく、地誌学の大きな理論体系を構築することは不可能で、きわめて実用的な概念的枠組だけが提示されることとなった。ただこの構想の中心点には、伝統的地誌学の自然・人間パラダイムを社会・空間パラダイム(Gesellschaft-Raum-Paradigma)に代えて再構築しようとする意図がみられる。

3. 地誌研究所の創設構想

1) 研究所の任務²⁴⁾

上述のように、地誌研究所という名称は以前の研究所のそれを踏襲したかたちで、学士院によって提案されたことによる。地誌研究所 (Institut für Länderkunde) のラントとかレンダーは国とか政府組織をもったテリトリーと同義ではなく、種々の規模をもった地域を意味する。このような空間的単位は、自然的所与の上につくられる社会の政治的構造化の過程であるばかりでなく、社会文化的経済的な構造化の過程をも意味する。学術的な地域研究は、空間に関する知識をえて、それを普及することを目的とする。地誌的知識は、生物的作用と非生物的作用の関係によって形成された自然空間から、そこに居住する住民

やその空間形成活動の結果生じた集落や文化景観、さらには経済、政治、社会、文化の地域構造とその過程にまで広く及ぶものである。

地誌研究の重要テーマには、①空間利用、②機能的結合、③社会的空間機能(社会的政治的テリトリーや空間意識、地域アイデンティティなど)などがある。通常このようなテーマは、地域の具体的な構造と発展過程の記述、分析、評価の目的をもって研究される。また地域間比較研究は理論的な枠組の拡大にも役立つ。地誌研究は主に現状に関係するが、集落などの空間構造はそれぞれの歴史を背負っているため、歴史的次元も含まれる。他方では、予測やシナリオなど将来にも関係し、計画的空間発展にも貢献する。

地誌研究所の任務としての地誌研究は地理学を中心とするが、多くの隣接科学とも密接な関係を持ち、学際的協力や分業がみられる。また、近代的地誌研究は応用を指向した基礎研究であり、その成果は学問自身にとってだけでなく他の実践部門にも提供される。その際には、応用部門から課題が与えられたりテーマが選択されることもありうる。

地誌研究所の重要事業には次の3つがある。

- ①地誌情報の収集、整理、資料作成、供与。地誌研究所は地誌学の中心的研究施設としてドイツやヨーロッパに関する地誌情報を可能なかぎり集め、精選し、内外の利用者に供与することを重要任務としており、地理情報システム(GIS)の技術や中央図書館も利用される。
- ②地生態的な構造、政治的構造、人口構造、経済構造、社会文化的構造とその発展過程に関する研究計画の実施。この計画は大学の地理学研究と協力して行う。
- ③出版事業や展示会、ゼミナール、発表会を通じて地誌情報や研究成果の発表。学問的に信用のある今日的な地誌的な全体的説明には大きな社会的需要がある。統一ドイツの基本構造と発展過程を示したドイツ・アトラスを構想し作成することも重要任務の1つと考えられている。

地誌研究所は、ヨーロッパ議会の決議によって1963年から計画されている国家情報施設(nationale Informationsstelle)の設立への要求を充たすものでもある。それは地理教育におけるヨーロッパ諸国の説明にみられる誤りや時代遅れの記述を糾すためのもので、オランダでは早くも1967年には地理学の情報・資料作成センター(Informations- und Dokumentationszentrum für Geographie)がユトレヒト大学に付設された²⁵⁾。統一ドイツにとってもこうした情報施設としての任務は重要である。

情報の利用者には、①空間に関する学問、とくに地理学、②社会空間の決定に携わる連邦、州、EU、③政治家、社会グループ、関心のある一般市民、④国の内外の教師や学校、⑤企業や経済団体、⑥国内や国外のジャーナリスト、などがある。かくして、今日の地誌学は重要な多くの課題に対処するとともに、広く情報収集や教育の任務を果たしている。

地誌研究所の地誌情報提供や研究活動は社会的要求に十分に対応しており、その存在は正当化されうる。

2) 今後約10年間の研究重点

上述したように、地誌研究所の創立には幸運を伴ったが、その背景にはヨーロッパ諸国の大変革という現象があった。ドイツ各州をはじめヨーロッパの政治的、経済的、社会的地図は今後新たに形づくられる状況にあり、地誌研究所は調査・情報活動を通じてこの変化過程を明かにし理解するという大きな任務を背負っている。

したがって、創設委員会はこの目標達成のために、今後10年間における研究活動の基本テーマを提示した。それは、「ドイツおよびヨーロッパにおける社会的再編過程や変革過程の空間的特性および空間的影響」の研究である。「空間的特性および空間的影響」の研究というのは、国や地域にみられる社会過程の具体的な形態やパターンとともに、集落や交通路、土地利用など空間的に現れたものを意味する。「社会的再編過程や変革過程」とは政治、経済社会、生態、文化などの面での社会の構造的変動のことである。再編(Restrukturierung)とは西ヨーロッパにおける空間発展の著しい変化であり、変革(Transformation)とは東ヨーロッパの共産主義以後の変化をさす。このような基本テーマをかかげるのは研究活動の無駄を省き、テーマの性急な地域的な分散化を避けるためである。

このような基本テーマのもとで、より具体的には次のような研究重点(Forschungsschwerpunkte)が考えられている。

①地誌学理論。地誌研究所の持続的任務の1つは、その研究の理論的方法論的基礎を批判的に検討することである。地誌学について現代的な科学理論的な理由づけが必要とされる今日、批判的考察はきわめて重要である。

②ヨーロッパにおける都市(集落)システムの変化。社会的再編過程と変革過程の結果生じた「新しいヨーロッパ」のなかでは、人口大集積地域やそれと関連して成長を遂げる集落システムは、人口、経済、交通などの分布にとって空間的骨格(räumliches Gerüst)を形成する。空間的集落構造の維持と社会経済的变化とはいかなる緊張関係にあるのか。大中心(Großzentren)の役割は、集落軸・交通軸の結節点としてまた国際的、国家的、地域的機能の立地点としていかなる変化を遂げてきたのか。両極分化傾向を考慮した場合に、小中心にはいかなる発展機会があるのか。東ヨーロッパの変革により中心地システムの機能的構造はいかに変化したのか。

③ドイツおよびヨーロッパにおける地域の政治的、経済的、文化的な意義変化。ドイツを含めたヨーロッパ諸国の社会再編過程では、国よりも地域の方が重要性を増している。多

くの国々では地域的な活発な運動が行われているし、EU条約における自助努力優先原理 (Subsidiaritätsprinzip) の導入は地域の評価を高め、政治の「地域化」に努める国が多くなっている。地域形成にはどのような過程がみられるのか。どのような地域代表者がいかなる目的と手段を用いて「社会の構築 (gesellschaftliche Konstruktion)」を行うのか。地域アイデンティティはいかなる前提や歴史的過程を経て形成されるのか。地域は今日と将来においていかなる機能をもつのか。

④ドイツおよびヨーロッパにおける土地利用や農村地域の変化。今日、人口大集積地域や都市だけでなく農村地域においても大きな変化が生じている。農業経営の後退—とくに不利な地域における農業的土地利用の減少—のもとで、農村では一層の人口流出と文化景観の荒廃の危険性がある。それはまた、生態的条件の改善や再自然化にとってチャンスでもある。とくに旧東ドイツ地域における集団農業の民営化は農村地域の著しい構造的変化となった。この過程は地域の景観像や土地利用にいかなる影響を及ぼすのか。

⑤ヨーロッパにおける交通システムの変化。EU統合の進展と東ヨーロッパの急速な接近はヨーロッパ全体に新たな交通体系を発生させ、交通量も増加したが、その地理的位置からしてドイツに対する影響はとくに大きい。交通軸の空間的骨格はいかにして発達するのか。それは個々の地域や国にいかなる影響を与えるのか。

⑥ヨーロッパにおける国家間・地域間人口移動の地域的影響。伝統的な南北地域間人口移動の意義は東西傾斜の出現によって低下している。国境制限の緩和のもとで地域間格差によって生ずる人口移動は、流出地域や流入地域にいかなる影響を与えているのか。

以上、事例としてあげた研究重点はそれぞれ大きなテーマであるので、地誌研究所単独ではその研究能力を越えたものである。したがって、これらの研究重点のうち2つまでを深く追究し、他の施設と協力することによって研究効率をあげるべきである。大学以外の協力機関としては、バートゴースベルク(ボン)の地誌・空間整備研究所 (BfLR)、ハノーファーの空間研究・国土計画アカデミー (ARL)、ドレスデンの生態的空間開発研究所 (Institut für ökologische Raumentwicklung)、ポツダムの地域開発・構造計画研究所 (Institut für Regionalentwicklung und Strukturplanung) がある。

3) 研究組織と作業領域

1991年11月8日の創設委員によって決定された定款によると、委員会議の他に3つの機関からなる。①所長。1994年11月にミュンスター大学のマイヤー (Mayr, A.) 教授が就任し、ライプチヒ大学地誌学教授を兼任する²⁶⁾。それまではライプチヒ大学との兼任がなく、ハノーファー大学のブーフホルツ (Buchholz, H.J.) 教授が初代所長を兼務した。②管理委員会。連邦とザクセン州による管理委員会が監督を務める。③学術顧問。10名までが学

者で、研究計画問題について助言する。

研究所の組織は、①研究(ドイツ部門, ヨーロッパ部門), ②地図学, ③地理情報システム(GIS), ④図書館, ⑤事務からなる。研究所スタッフ35名のうち16名が研究者である。研究部門は厳格な分業ではなく、フレキシブルに対応できるように組織されている。建物は旧帝国裁判所(Reichsgericht)の3000m²を借用していたが、移転後は3700m²のうち1900m²が図書館となった。図書館には今世紀初頭以来の図書17.6万点と地図約5000点, それに歴史的貴重本やアトラスがあり, 地理学専門の公文書館もある。前身の地理学・地生態学研究所(IfGG)や旧東ドイツ地理学会の資料もある。図書館は地理学関係ではドイツ最大の規模をもち, たとえばパリの国際地理学図書目録(Bibliographie Géographique Internationale)のドイツ部門担当を通じて, ドイツ地理学専門書の文書記録の中心的な任務を果たし, またコンピュータを用いて外国からでも文献検索サービスを行うことができ, 他の文献データバンクとのネットワーク化にも務めている。

刊行物としては Europa Regional が1992年から季刊雑誌として刊行されたのをはじめ, 前身をなす研究所の叢書を受け継ぐかたちで Beiträge zur Regionalen Geographie が第36巻(1994年)から, Werte der deutschen Heimat が第52巻からそれぞれ刊行され, 不定期の情報収集として Daten, Fakten, Literatur zur Geographie Europas も刊行されているほか, バートゴースベルク(ボン)の研究所と協力して Bericht zur deutschen Landeskunde の編集を行っている。そのほか単行書の出版も用意しており, プーフホルツ所長のもとで『統一ドイツ地理小冊』(1992)が出版された(Buchholz, Hrsg, 1995)。

地誌研究所は他の連邦・州共同出資の研究所と同様に, 何年かおきに業績審査を受けることになっている。創立の理念には厳しいものがあるが, 目下のところ出版物の刊行や研究会, セミナールの開催などの研究活動はきわめて旺盛であり, その活動は社会的にも評価されているので, 次回の審査によって廃止されるようなことはないだろうと考えられている²⁷⁾。

V. その他の地誌研究機関とエリアスタディ

以上, ライプチヒの地誌研究所について詳しく紹介したが, その他の地誌研究機関についても少し触れておきたい。

もう1つの地誌研究所としては, バートゴースベルク(ボン)にある連邦所属の国内地誌・空間整備研究所(Bundesforschungsanstalt für Landeskunde und Raumordnung, BfLR)が有名である。これは1941年に帝国地形図作成局(Reichsamt für Landesauf-

nahme) のなかに国内地誌部 (Abteilung für Landeskunde) として誕生し、1953年から連邦国内地誌研究所となり、1968年以後今日の名称に改められたものである (Birkenhauer, *et al.*, 1980)。上記の雑誌 *Berichte zur deutschen Landeskunde* (年2回) がここから刊行されてきたほか、月刊誌 *Informationen zur Raumentwicklung* (以前の *Informationen*) が出され、さらにラツェル (Ratzel, F.) の創刊 (1部変更) になる *Forschungen zur deutschen Landeskunde* も不定期刊行物として刊行されている。

ここでは、マイネン所長の時代には自然地域区分 (Naturräumliche Gliederung) や中心地圏研究 (Kluczka, 1970) など全国にわたる基本的な地域構造の研究が中心をなしていたが、マイネン所長の退官以後1970年代には研究テーマが大きく変化し、空間整備政策とより密接に関係した研究に限定されるかたちで、地域格差とその変化に関する課題が中心となった (Stiens, 1996)。旧西ドイツ地域を58から上位中心地を中心とした75 (旧東ドイツを加えると97) の空間整備地域 (Raumordnungsregion) に区分し、この地域を単位とした新たな資料を早期に公表して「現在の空間観察 (Laufende Raumb Beobachtung)」を行い、早期警報用具 (Frühwarninstrument) として地域構造を分析する役目を果たしてきた。さらに、1980年代には「2010年を目標とした空間整備予測 (Raumordnungsprognose 2010)」などが作成された。このようにして、国による国内地誌 (staatliche Landeskunde) の研究では、通常われわれが考える地誌研究よりもかなり幅広い問題が研究対象とされている。

一方、大学の地誌研究においては、ルール大学の東アジア、ハイデルベルク大学の南アジア、ベルリン自由大学の北アメリカ、パッサウ大学の東南アジア (小規模) などがあり、チュービンゲン大学ではオリエンタル・アトラスを作成した。また、大学以外にはハンブルクのアジア学研究所 (Institut für Asienkunde in Hamburg) がある。

そうしたなかで最近設置されたものにデュイスブルク大学東アジア研究所 (Institut für Ostasienwissenschaften) がある。これはルール大学の古典文献に基づく文化を中心とした東アジア研究とは異なって、企業活動など実際に役立つ研究コースであり、日本と中国に分かれ、いずれかの語を修得するとともに、その地域の経済学、社会学、地理学、文化・歴史学の4分野を学際的に研究する新しい研究所である。したがって、アングロサクソン諸国や日本とは異なって、これまで奮わなかったエリアスタディに対する初めての試みといえる。研究所には5名の教授と8名の助手 (教授代理を含む) が研究と教育に従事する。具体的には、東アジアを代表する人間の関係を分析し、とくに日本のハイテク産業分野の提携戦略について考察する。さらに、経済的变化を政治・社会・文化的変化の中で捉え、経済行動の文化的決定要因 (生活様式や価値観) を重視する発展理論に新たにアプローチす

る。世界経済への統合とその国家経済・地域経済への影響、さらには重要な経済要因としての教育関係、人口移動と地域間格差、環境問題などについて考察の対象とするものである²⁸⁾。

日本を中心とする東アジア経済の研究は1986/87年に始まったが、研究所が公式に認可されたのは1994年のことであり、正式に発足したのは1995年2月1日であった。したがって同研究所は発足したばかりで、卒業生を社会に送り出すのはこれからである。機関誌として *Duisburger Arbeitspapiere Ostasienwissenschaften* を刊行している。

ドイツではエリアスタディに対する知名度は大学以外では依然として低い (Derichs, *et al.*, 1995)。東アジア部門ではエキスパートといわれる人たちでも現地語のできないのが一般的である。このような背景のもとで戦後10年間の現代日本の研究がアメリカ中心であったのは当然である。ドイツではこの地域については古典や哲学、宗教、精神科学、歴史などの面で異文化との接近がなされ、1960年代になって初めて、伝統的な中国学や日本学では答えられない現代東アジアへの関心が高まってきた。その結果エリアスタディが導入されたが、年がたつにつれてこの種のエリアスタディには批判が現れてきた。というのは、語学とある専門科学だけを学んで西洋の科学理論をただエキゾチックな外国に適用し、単に実証データを収集し、欧米的な見方でもって東アジアを語るだけでは不十分なことがわかってきたからである。

1980年代になって種々の大学で地域研究のコースが設置されたときにも、こうした批判が現れた。したがって、今日のエリアスタディには、①語学能力、②少なくとも1つの専門科学とともに、③文化的能力が加えられている。文化的能力は語学や地誌研究などを中心とした学習の補足的注意だけではえられず、各地域について体系的に用意された幅広い一般知識が必要であると考えられている。

将来ドイツにおいても経済や政治のグローバル化の進展のなかで、エリアスタディのもつ潜在力は大いに利用されることになるだろう。今日のように従来の学問の専門知識を高く評価し、言語や地域的な知識は余技か飾りとしてみるような態度では世界的な活躍には不十分であり、将来はこれらについての幅広い知識が要求されよう。地理学のような「概観的な学問」は専門的な科学性には乏しいが、包括的な思考能力をもつ点では評価されてよい。

同研究所主催の「ドイツ経済はアジア学を必要とするか」という討論のなかでは、東アジア研究を疑問視したり否定する企業代表者が多かった。それは実用に乏しく、理論的に煩わしいことと、研究コースの時間的な長さに対する批判であった。アジアとの経済的取引においては英語と表面的な土地知識をもち、専門に通じたベテラン社員で十分であり、

高い資格をえた高価な専門家よりも安価に雇える現地人社員の方が有利であると考えられていた。このように、ドイツ企業が東アジアを正しく認識しない背景には、近くの西ヨーロッパや北アメリカ、東ヨーロッパなどの親しい市場で十分利益をあげ、強い競争力と文化的障壁をもつ日本市場は敬遠されてきたという経緯がある。しかし、東アジア地域は長期的には非常に重要で大きな意味をもつことを理解すべきである。目下のところは企業などの反応は冷ややかであるが、フリュヒター(Flüchter, W.) 所長はいずれその実力が認められる日が来ると信じている²⁹⁾。

最後に、ドイツにおけるエリアスタディの例をあげておきたい。1994年にはマイヤー・ポール (Mayer u. Pohl, 1994) の編集になる『日本事情—地理, 歴史, 政治, 経済, 社会, 文化—』が刊行された。これは、政治と経済を中心として5章からなり、36名が執筆した500頁を越える大冊である。第1章「基盤」の第1節をなす「地理的な問題提起・構造・諸問題」のところだけが地理学者フリュヒターの担当となっている。その節はさらに、①地政学的な前提条件、②自然空間と人文地域・国土開発へのポテンシャル、③日本の経済成功を説明したのは地理的決定要因か、④原料不足と土地狭小性は経済成功にとってハンディか、⑤原料としての人的資源—ハイテク産業による地域発展の新たな可能性、⑥狭い空間における大きな経済力—人口発展・国内人口移動・都市化、の6項目に分かれる。

ドイツにおける外国のエリアスタディについて、筆者はあまり例を知らないが、本書はエリアスタディの新たな試みといえる。その場合に、地理学者がどのような問題を担当するかは興味ある問題である。本書において歴史と地理が導入部門としての第1章に押し込められているのは、編者が経済学者と政治学者のためであろうか。エリアスタディにおいて最も関心の高いのはその国の経済や政治の分野であり、社会の投影によって形成された地表空間の構造とその変化に関する地理学・地誌学の研究は、あまり高く評価されていないように思われる。

VI. むすび

以上において、ドイツにおける地誌研究の動向を研究内容や問題点だけでなく、研究施設や研究状況の面からも検討してきた。第2次大戦後におけるドイツ地理学の動向はドイツ地理学会キール大会を境にして大きく転換したが、1980年代半ばには再びパラダイムシフトを経験した。それは、地誌に対する社会的要求から地誌学の再生の方向に向かったものではあったが、地理学については研究課題の細分化によって—地理学だけではないが—中核を欠く学問への方向を歩むこととなった。地域概念については、従来の実在する地表

面の地域から研究者が分析や整理の都合上考えられたものへと変化し、経済空間、社会空間だけでなく地域意識や地域アイデンティティなど人間の頭の中の空間まで対象となってきた。

しかしそうしたなかでも、ドイツ地誌学はイギリスやフランスとは異なった独自の展開がみられた。イギリスのように科学哲学のなかで新たな地域地理学を論ずるというよりも、ヘットナーやポーベク・シュミットヒューゼンなどドイツ語圏内の先学地理学者の理論と対比し、それを発展させるかたちで新たな議論が展開されてきた。しかし最近では、イギリス・フランスなど国外の地理学の動向にも注目するようになってきた。イギリスの地誌学は理論的には、①政治経済的アプローチ、②人文主義的現象学的アプローチ、③構造化理論的アプローチに類型化されるが (Wood, 1996)、ドイツにおいてもこれらのアプローチが全く問題にされなかったというわけではない。とくに地域意識や地域アイデンティティについてはかなり多くの研究が積み、地域代表者の意思決定行動についても論議されており、構造化理論によるパーシの研究はドイツでも高く評価されている。また、アングロサクソン圏の地誌研究において合意された、①地誌学は社会科学である、②地誌学の実証研究は理論によって武装されねばならない、③地誌学は地域発展に関する研究である (Hoekveld, *et al.*, 1994)、などの点では考え方にも大きな差異はないようにみえる。

しかし、ドイツでは地誌学の社会的有用性が強く認識されており、地誌研究は理論的研究よりも実用的、実践的なものが先行する点に特徴がある。このことは旧稿においても指摘したが (森川, 1992)、地誌研究所の今後の活動によってその傾向はますます強まるであろう。地誌研究所の「今後10年間の研究重点」に示されるように、地誌学の研究対象は地域構造とその発展過程を中心としたものであり、それはまさに地理学の本質的な課題である³⁰⁾。地誌研究にとっては地域の発展法則の解明が重要課題とされており、地誌学と一般地理学の領域の区別はそれほど明瞭なものとはいえない。

さらに、地域構造の変化から予測される地域発展の将来予測は地域計画にとって最も重要なものであるし (Stiens, 1996)、旅行ブームによって旅行案内書が飛ぶように売れるドイツでは、旅行書における地誌的概要の執筆は大学卒業生の就職口になる可能性もある (Popp, 1997)。エリアスタディの今後については不明であるが、デュイスブルク大学東アジア研究所のような研究所はその実績が認められ、学際的研究も増加するであろう。そうした動きと連動するかたちで、地誌学の理論や方法論の検討も今後は強まるものと考えられる。

謝辞

基盤研究Cによる1996年11月上旬のオランダ・ドイツ訪問の際には多くの方にお世話になった。とくに

この問題に関係しては、Hoekveld, G.A. 教授（ユトレヒト大）やデュイスブルク大の Blotevogel, H.H. 教授（ドイツ地理学会次期会長）、Flüchter, W. 教授（東アジア研究所所長）、Wood, G. 博士、Hohn, U. u. A. 博士ご夫妻、Deilmann, B. 博士、地誌研究所の Mayr, A. 所長（兼ライプチヒ大教授）にお世話になった。とくに Blotevogel 教授には本研究のために同氏の投稿中の原稿をお送りいただくなど種々のご厚意をいただいた。また、ミュンヘン工科大学の Popp, H. 教授からは質問状に好意的なご解答をいただき、ブレーメン大の Bahrenberg, G. 教授や都立大若林芳樹助教授には文献収集においてご協力をいただいた。記してお礼を申し上げたい。なお本研究には、文部省科研基盤研究C「欧米諸国における地誌研究の動向」（1996/97年）を使用した。

注

- 1) 今日では、法則追究的アプローチと個性追究的アプローチとに分離するのはかなり恣意的であり、科学哲学的には重要とはいえないといわれる (Pohl, 1996)。
- 2) 1995年10月には当研究資料センターの主催で『地誌学とエリアスタディー現状と課題ー』についてシンポジウムを開催したときにも、熱心な討論が行われ多くの貴重な意見が発表された。『地誌研年報』第5号(1995)参照。
- 3) 1980年代初頭において合衆国の地理学者の10%だけが海外調査に従事しているのに対して、旧西ドイツの地理学者の80%が海外調査を行っているという (Lichtenberger, 1984; 森川, 1992)。
- 4) イギリスでは、ネオマルキストやポストマルキストの信念をもつ地理学者の狭いグループの中においてではあるが、学際的な理論に他国よりも真剣に取り組み、より深い考察が行われているところに特色があるといわれる。
- 5) プロートフォーゲル (Blotevogel, 1996b) などその発表論文は Ber. z.deutsch. Landeskunde, Bd.70, H.1(1996) に収録されている。
- 6) マイヤー・プロートフォーゲル両教授のご教示による(1996年11月4日, 6日)。
- 7) ただし、地誌図式を初めて提唱したのはキルヒホフ (Kirchhoff, 1884) であった。
- 8) 旧西ドイツでは、バーテルス (Bartels, D.) やハルト (Hard, G.) に代表される新たな展開がみられるまでの1945~65年間には、地誌学は地理学においても地理教育の分野でも確固たる地位を占めていた。
- 9) 旧東ドイツでは、1950年代・60年代には地誌学は激しく拒絶されたが、1970年代以後ある程度の回復がみられ、東ドイツ・アトラスの作成のために自然・人文地理学の共同作業がみられた。ただし、方法的考察はイデオロギーによって禁止されていた。
- 10) ボーベクとハルトケはともに社会地理学の提唱者として知られているが、ボーベクにあつては「社会地理学的ラントシャフト研究」であり、ラントシャフト研究に重点がおかれていたが、ハルトケにおいては「社会研究の手段としてラントシャフト」を利用するインディケーター法 (indikatorischer Ansatz) が考えられた。ハルトケは「人間の共同生活の(空間的)法則」を発見して、それを空間計画や地域政策に利用すべきであると考えており、両者の間にはかなり大きな差異がみられる (Werlen, 1995)。
- 11) バーレンベルク (Bahrenberg, 1979a) は、一般地理学を用いて1回限りの現象に解釈を与えるものを地域地理学と考えている。ただしこの発想からすれば、後述のように、現在の一般地理学で説明できないが重要性をもった残余の部分がネグレクトされ、地誌研究の一般地理学への貢献は考えられないことになる。今日では地誌学に代わる新しいものとして地域地理学という名称が用いられているが、バーレンベルクのような解釈だけではない。本稿では地域地理学にそれほど重要な意味を与えることなく、新しい地誌学という意味で用いている。
- 12) ドイツでは外国語教育のためにイギリス、合衆国、フランスなどの地誌が利用されるので、これらの国の地誌(書)の需要はとくに多い。
- 13) ただし、地域の規模については地域的メディアの受信範囲から強い地域意識をもった郷土までさまざまであり、一様とはいえない。

- 14) イギリス, オランダ, フランスにおける主要な地誌学の理論研究としてプロートフォーゲルはジョンストン (Johnston, *et al.*, 1990), ハウアー・フックフェルト (Hauer u. Hoekveld, 1993), フックフェルト夫妻 (Hoekveld u. Hoekveld-Meijer, 1991; 1993; 1994), テルロウ (Terlouw, 1989; 1994), ペイリー・フェリエ (Bailly u. Ferrier, 1986), クラヴァル (Claval, 1993), フェリエ (Ferrier, 1993)などをあげている。
- 15) 多次元分析や尺度性の問題については筆者は十分理解していない。
- 16) 第1空間は日常的に理解される空間であり, 第2空間は見方の形態 (Anschauungsform) としての空間であり, 第3空間は絶対空間である。
- 17) イプセン (Ipsen, 1993) はアルプスのゼムリンク (Semmring) 山地とチラー谷 (Zillertal) を例にあげ, 地域評価の変化に基づく地域アイデンティティの変化を説明している。
- 18) 緊密な関係にあると思われる「活動地域」の中の経済活動地域と「現実の地域」の中の機能地域や複合システムの地域との間の差異については, もう少し説明がほしい気がする。
- 19) シュテーヴィヒ (Stewig, 1979) もシステム分析的な地誌学 (systemanalytische Länderkunde) を考えているが, なぜか引用されていない。
- 20) 彼の論文はプロートフォーゲル (Blotevogel, 1996a) やバーレンベルク (Bahrenberg, 1993) などによってよく引用され, 高い評価をえている。
- 21) プレースとリージョンの関係について, ジョンストン (Johnston, 1991) はリージョンの代わりにプレースを使っており, 上記のパーシィとは異なる。したがってこの概念規定にはなお不統一がみられる。
- 22) 研究所の前身をなす地誌博物館 (Museum für Länderkunde) は, 世界でも希な地理専門の博物館として1896年にライプチヒに創立され, 展示と資料収集活動を行ってきた。それが第2次大戦中の1942年にドイツ地誌研究所に格上げされ, 自然地理やアトラス地図作成 (Atlaskartographie) の分野でも研究を行い, 学術講演や展示を通じて一般市民に地理的知識の普及にも務めた。戦後1968年には旧東ドイツの科学アカデミーに属し地理学・地生態学研究所 (Institut für Geographie und Geoökologie) となり, 従来のグローバルな研究に代わって旧東ドイツ国内の地理的内容の分析に従事するようになった。とくに『東ドイツ・アトラス』編纂や地生態学研究, 都鄙研究などにおいて成果をあげた。しかしこれまでの専門図書その他はこの研究所に受け継がれ, スタッフは増加して182人となった。その1/3はベルリンの分室で作業していた (Buchholz, *et al.*, 1995, S.1)。
- 23) しかし, 非地理学的な地誌やエリアスタディとの間の摩擦はないといえるだろうか。筆者には疑問に思える。
- 24) 「成立と目標」は省略する。
- 25) ユトレヒト大学地理学部の1室を使用した専任1人の小さい国立施設で, 教科書の誤りを糺している。日本の高校地理の教科書は東京から英訳したものが送付される (1996年11月4日に筆者訪問)。
- 26) ライプチヒ大学地理学教室は1968年に廃止され, 1995年に新設された。
- 27) プロートフォーゲル教授談 (1996年11月4日)。
- 28) 同研究所の案内書による。
- 29) フリュヒター教授談 (1996年11月5日)。
- 30) ユトレヒト大学のフックフェルト教授夫妻は, アングロサクソン圏における地域地理学議論を越えて新しい地誌研究の枠組を提示したが (Hoekveld and Hoekveld-Meijer, 1994), それは地域の歴史的発展過程, 地域内・地域間結合関係, 空間的アイデンティティをも含めた等質地域的特性を主としたもので, 地誌研究所の研究課題として提示された「地域構造研究」とそれほど大きく異なったものではないように思われる。

文 献

- 森川 洋(1982)：ドイツの地誌学の最近の研究動向。石田寛教授退官記念事業会編『地域—その文化と自然』福武書店, pp.495-507.
- 森川 洋(1992)：地誌学の研究動向に関する一考察。地理科学, 第47巻, pp.15-35.
- Bahrenberg, G.(1979a): Von der Anthropogeographie zur Regionalforschung—eine Zwischenbilanz. Sedlecek, P.(Hrsg.): *Zur Situation der deutschen Geographie zehn Jahre nach Kiel*. Osnabrücker Studien zur Geographie. Bd.2, S.59-68.
- Bahrenberg, G.(1979b): Anmerkungen zu E. Wirths vergeblichen Versuch einer wissenschaftstheoretischen Begründung der Länderkunde. *Geogr. Zeitschr.*, 67, S.147-157.
- Bahrenberg, G.(1988): Zwecke und Methoden der Raumgliederung. *Raumforsch. u. Raumordn.*, 46, S.2-1.
- Bahrenberg, G.(1993): Dimensions of regionalism. Dirven, E. et al. (eds.): *Stuck in the region? Changing scales for regional identity*. Nederlandse Geogr. Studies, 155, pp.61-74.
- Bahrenberg, G.(1996): Die Länderkunde im Paradigmenstreit um 1970. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 70-1, S.41-54.
- Bailly, A.S. et Ferrier, J.P.(1986): Savoir lire le territoire: Plaidoyer pour une géographie régionale attentive a la vie quotidienne. *L'espace géographique*, 4, pp.259-264 (Blotevogel, 1996a による).
- Bartels, D.(1968a): *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung einer Geographie des Menschen*. Geogr. Zeitschr. Beihefte, 225S.
- Bartels, D.(1980): Die konservative Umarmung der "Revolution" zu Eugen Wirths Versuch in 'Theoretischer Geographie'. *Geogr. Zeitschr.*, 68-2, S.121-131.
- Bartels, D.(1981): Länderkunde und Hochschulforschung. *Kieler Geogr. Schriften, Bd.52 (Beiträge zur Theorie und Methode der Länderkunde. Oskar Schmieder zum Gedenken)*, S.43-49.
- Birkenhauer, J.(1984): Das funktionale Prinzip in der Regionalen Geographie. *44. Deutscher Geographentag Münster 1983, Tagungsber. u. wiss. Abhandl.*, S.340-349.
- Birkenhauer J., et al. (1980): Länderkunde—Regionale Geographie. *Harms Pädagogische Reihe*. S.4-81.
- Blotevogel, H.H.(1993): *Raumkonzepte in der Geographie und Raumplanung*. Geogr. Inst. Diskussionspapier 2/1993, Univ. Duisburg, 49 S.
- Blotevogel, H.H.(1996a): Aus dem Wege zu einer 'Theorie der Regionalität': Die Region als Forschungsobjekt der Geographie. Brunn, G.(Hrsg.): *Region und Regionsbildung in Europa. Konzeptionen der Forschung und empirische Befunde*. Baden-Baden: Nomos=Schriftenreihe d. Inst. f. Europ. Regionalforschungen 1, S.44-68.
- Blotevogel, H.H.(1996b): Aufgaben und Probleme der Regionalen Geographie heute—Überlegungen zur Theorie der Landes- und Länderkunde anlässlich des Gründungskonzepts als Instituts für Länderkunde, Leipzig. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 70-1, S.11-40.
- Blotevogel, H.H., Heinritz, G. u. Popp, H.(1986): Regionalbewußtsein, Bemerkungen zum Leitbegriff einer Tagung. *Ber.z.deutsch. Landesk.*, 60-1, S.103-114.
- Bobek, H.(1957): Gedanken über das logische System der Geographie. *Mitt. d. Geogr. Gesell. Wien*, 99, S.122-145. *Nachdruck in*: Storkebaum, W.(Hrsg.)(1967): *Zum Gegenstand und zur Methode der Geographie*. Wiss. Buchgesell, Darmstadt, S.289-329.
- Bobek, H. u. Schmithüsen, J.(1949): Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, 3, S.112-120.
- Buchholz, H.J.(Hrsg.)(1995): *Das vereinte Deutschland. Eine kleine Geographie*. Institut für Länderkunde. 88S.
- Buchholz, H.J., Grimm, F.D. u. Mayr, A. (Hrsg.)(1995): *Tätigkeitsbericht 1992-1994*. Institut für

- Länderkunde Leipzig e.V.47S.
- Bunge, W.(1962): *Theoretical geography*. Lund Studies in Geogr., Ser .C (西村嘉助訳 (1970) : 理論地理学。大明堂)。
- Claval, P.(1993): *Institution a la géographie régionale*. Paris: Nathan Université. 288p. (Blotevogel, 1996a による)。
- Danielzyk, R. u. Ossenbrügge, J.(1993): Perspektiven geographischer Regionalforschung. „Locality Studies” and regulationstheoretische Ansätze. *Geogr. Rundschau*, 45-4, S.210-216.
- Derichs, C., et al. (1995): *Ostasiatische Regionalstudien: Warum?* Duisburger Arbeitspapiere Ostasienwissenschaften, No.1/1995(Institut für Ostasienwissenschaften)34S.
- Dürr, H.(1979): *Für eine offene Geographie gegen eine Geographie im Elfenbeinturm*. Karlsruher Manuskript zur Mathematischen und Theoretischen Wirtschafts- und Sozialgeographie, H.36 (Popp, 1983 による)。
- Ferrier, J.P.(1993): Principles for a global regional geography and their implications for Southern France. Hauer, J. and Hoekveld, G.A.(eds.): *Moving regions*. Nederlandse Geogr. Studies, 161, pp.201-212.
- Ganser, K.(1970): Thesen zur Ausbildung des Diplomgeographen. 37. *Deutscher Geographentag, Kiel 1969, Tagungsber. u. wiss. Abhandl.*,S.183-190.
- Giddens, A.(1992): *Kritische Theorie der Spätmoderne*. Wien (Werlen, 1993 による)。
- Grigg, D.(1965): The logic of regional systems. *A.A.A.G.*, 55, pp.465-491.
- Hard, G.(1973): *Die Geographie. Eine wissenschaftstheoretische Einführung*. Berlin, New York: Sammlung Goeschel, Bd.9001.
- Hauer, J. and Hoekveld, G.A.(eds.)(1993): *Moving regions*. Nederlandse Geogr. Studies, 161, 271p.
- Heinritz, G.(1982): Nach 100 Jahren noch immer am Leben?—*Deutsche Landeskunde 1981—*. *Ber.z. deutsch. Landesk.*, 56, S.9-15.
- Hettner, A.(1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Breslau: Ferdinand Hirt, 463S.
- Hettner, A.(1934): Der Begriff der Ganzheit in der Geographie. *Geogr. Zeitschr.*, 40, S.141-144(Wirth, 1978 による)。
- Hoekveld, G.A. and Hoekveld-Meijer, G.(1991): *Regional development, spatial and societal contexts, key concepts in regional geographic methodology*. Utrecht: Faculty of Geogr. Sciences=REGIS-Publicatie 9 (Blotevogel, 1996a による)。
- Hoekveld, G.A. and Hoekveld-Meijer, G.(1993): Regional policy from a regional geographic point of view: a comparison of the Dutch provinces Friesland and Zeeland. *Fennia*, 171:2, pp.99-135.
- Hoekveld, G.A. and Hoekveld-Meijer, G.(1994): The regional development of France: An application of a regional geographic methodology. Terlouw, C.P.(ed.): *Methodological exercises in regional geography: France as an example*. Nederlandse Geogr. Studies, 179, pp.23-62.
- Hoekveld, G.A., Hoekveld-Meijer, G. and Terlouw, C.P.(1994): Introduction: patterns in regional geography. Terlouw, C.P.(ed.): *Methodological exercises in regional geography: France as an example*. Nederlandse Geogr. Studies, 179, pp.3-11.
- Ipsen, D.(1993): Regionale Identität. Überlegungen zum politischen Charakter einer psychosozialen Raumkategorie. *Raumforsch. u. Raumordn.*, 51, S.9-18.
- Johnston, R.(1991): A place for everything and everything in its place. *Trans. Inst. Br. Geogr.*, NS.16, pp.131-147.
- Johnston, R., Hauer, J. and Hoekveld, G.A.(eds.)(1990): *Regional geography. Current developments and future prospects*. London: Routledge, 216p.
- Juillard, E.(1962): La région: essai de definition. *Annales de Géographie*, 71, pp.483-499(Blotevogel, 1996b による)。

- Kirchhoff, A.(1884): Bemerkungen zur Methode landeskundlicher Forschungen. 4. *Deutscher Geographentag München, Tagungsber. u. wiss. Abhandl.* (未見)
- Kluczka, G.(1970): *Zentrale Orte und zentralörtliche Bereiche mittlerer und höherer Stufe in der Bundesrepublik Deutschland.* Forsch.z.deutsch. Landesk., 194, 46S.
- Lehmann, E.(1973): Zur theoretischen Grundlegung des Begriffes Region. *Geogr. Berichte*, 18, S.41-48.
- Lichtenberger, E.(1984): The German-speaking countries. Johnston, R.J. and Claval, P.(eds.): *Geography since the second world war. An international survey.* London: Croom Helm, pp.156-184.
- Mayer, H.J. u. Pohl, M.(Hrsg.)(1994): *Länderbericht Japan. Geographie, Geschichte, Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur.* Bundeszentrale für politische Bildung, Schriftenreihe Bd.324, 556S.
- Nir, D.(1987): Regional geography considered from the systems-approach. *Geoforum*, 18-2, pp.187-202.
- Paasi, A.(1986): The institutionalization of the regions: a theoretical framework for understanding the emergence of regions and the constitution of regional identity. *Fennia*, 164, pp.105-146.
- Pohl, J.(1993): Kann es eine Geographie ohne Raum geben? Zum Verhältnis von Theoriediskussion und Disziplinpolitik. *Erdkunde*, 47, S.255-266.
- Pohl, J.(1996): Ansätze zu einer hermeneutischen Begründung der Regionalen Geographie: Landes- und Länderkunde als Erforschung regionaler Lebenspraxis? *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 70, S.73-92.
- Popp, H.(1983): Geographische Landeskunde – was heißt das eigentlich? *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 57, S.17-38.
- Popp, H.(1996): Ziele einer modernen geographischen Landeskunde als gesellschaftsbezogenen Aufgabe. *50. Deutscher Geographentag Potsdam, Tagungsber u. wiss. Abhandl.*, Bd. 4, S.142-150.
- Popp, H.(1997): Reiseführer-Literatur und geographische Landeskunde. *Geogr. Rundschau*, 49, H.3 (掲載予定)
- Pred, A.(1984): Structuration, biography formation and knowledge: observations on port growth during the late mercantile period. *Environment and Planning D*, 2, pp.251-275.
- Schaefer, F.K.(1953): Exceptionalism in geography. a methodological examination. *A.A.A.G.*, 43, pp.226-249.
- Schöller, P.(1978): Aufgaben heutiger Länderkunde. *Geogr. Rundschau*, 30, S.296-297.
- Schmidt, W.(1993): Geheimnisvoller Geograph. *Die Zeit*, Nr.20 vom 14. 5, 1993 (Pohl, 1993 による)
- Schmieder, O.(1969): Probleme der Länderkunde im Spiegel der Kritik. *Geogr. Zeitschr.*, 57, S.19-41. *Nachdruck* in: Stewig, R.(Hrsg.) (1979): *Probleme der Länderkunde.* Darmstadt: Wiss. Buchgesell., S. 132-156 (未見).
- Schulze, A.(1970): Allgemeine Geographie statt Länderkunde! Zugleich eine Fortsetzung der Diskussion um den exemplarischen Erdkundeunterricht. *Geogr. Rundschau*, 22, S.1-10.
- Spethmann, H.(1927): Neue Wege in der Länderkunde. *Zeitschr.f.Geopolitik*, 4, S.989-998. *Nachdruck in:* Stewig, H.(Hrsg.)(1979): *Probleme der Länderkunde.* Darmstadt:Wiss. Buchgesell., S.57-67 (未見).
- Spethmann, H.(1928): *Dynamische Länderkunde.* Breslau: Ferdinand Hirt, 244S.
- Stern, D.I.(1992): Do regions exist? Implications of synergetic for regional geography. *Environment and Planning A*, 24, pp.1431-1448.
- Stewig, R.(1979): Probleme der Länderkunde. Stewig, R.(Hrsg.): *Probleme der Länderkunde.* Wiss. Buchgesell. S.1-35.
- Stiens, G.(1996): Die deutsche Landeskunde nach Emil Meynen und Versuch eines Ausblicks auf deren Zukunft. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 70, S.93-113.
- Terlouw(1989): World-system theory and regional geography. A preliminary exploration of the context of regional geography. *TESG.*, 80, pp.206-221.
- Terlouw(ed.)(1994): *Methodological exercises in regional geography; France as an example.* Nederlandse Geogr. Studies, 179, 217p.
- Tuan, Y-F.(1976): Humanistic geography. *A.A.A.G.*, 66, pp.266-276.

- Werlen, B.(1988): Von der Raum- zur Situationswissenschaft. *Geogr. Zeitschr.*, 76, S.193-207.
- Werlen, B.(1993a): Gibt es eine Geographie ohne Raum? Zum Verhältnis von traditioneller Geographie und zeitgenössischen Gesellschaften. *Erdkunde*, 47, S.241-255.
- Werlen, B.(1993b): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.2, Von der Regionalgeographie zu den alltäglichen Regionalisierungen.* Erdkundliches Wissen 116, 250S. (未見)
- Werlen, B.(1995): Landschaft, Raum und Gesellschaft. Entstehungs- und Entwicklungsgeschichte wissenschaftlicher Sozialgeographie. *Geogr. Rundschau*, 47, S.513-522.
- Whittlesey, D.(1954): Regional concept and the regional method. James, P.E. and Jones, C.F.(eds.): *American geography. Inventory and prospect.* A.A.G., Syracuse Univ. Press, pp.19-68.
- Wirth, E.(1978): Zur wissenschaftstheoretischen Problematik der Länderkunde. *Geogr. Zeitschr.*, 66, S.241-261.
- Wirth, E.(1979a): *Theoretische Geographie. Grundzüge einer theoretischen Kulturgeographie.* Stuttgart: B.G.Teubner, Reihe Studienbücher der Geographie. 336S.
- Wirth, E.(1979b): Zum Beitrag von G. Bahrenberg: 'Anmerkungen zu E.Wirth's verglichen Versuch'. *Geogr. Zeitschr.*, 67, S.158-162.
- Wirth, E.(1987): Konzeptionelle Überlegungen für eine neue regionale Geographie. 45. *Deutscher Geographentag Berlin 1985, Tagungsber. u. wiss. Abhandl.*, S.146-149.
- Wood, G.(1996): Regionale Geographie im Umbruch? Ansätze einer sozialwissenschaftlichen "New Regional Geography" im angelsächsischen Sprachraum. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 70-1, S.55-72.